

我が心の豎琴

城所 進



我が心の豎琴

城所 進

我が心の堅土琴

城所進

目次

序にかえて

6

我が心の豎琴

はじめに

10

幼き日の心の誕生

12

少年期(一)

14

少年期(二)

16

少年期(三)

20

成人(一)

24

成人(二)

28

生きる(一)

33

生きる(二)

37

結婚

43

家庭（一）

親として

人生を考える

仕事

第二の仕事

我が心への呼び掛け

家庭（二）

随想

全体と個人と

『出合い』

路面電車

東大病院にて

故郷

86 82 76 72 68 62 59 57 53 51 49 45

道草

蟻道

心の泉（忘れ得ぬ小さなできごと）

存在

心眼

心打たれしもの

古希の前日

『私の友』について

昼休みの丘にて

90

100

102

104

106

110

116

120

124

序にかえて

あの人は六〇才、随分長生きしたものだ――と人のことをみて思っていた時は、ついこの間のように思えるが、私自身が人生五〇年と言われていた時代に生まれ、人生八〇年と言われる時代に突入した現代に「実在している」――何か夢を見ている気持ちさえするこの頃である。

この一〇月で満九六才を迎える母も健在であり、苦勞を共にした妻も地域のために多少のお役を勤めており、私も満七〇才を迎える今日まで何とか現役で好きな仕事をできるのは、本当に恵まれた人生だと感謝している。三人の子供たちも、それぞれが選んだ道を健康に恵まれながら歩んでいることは、私にとって最大の喜びであり、古希の私に対する最大のプレゼントである。

私が小学生の頃、親が正月になるとよく新しい日記帳を買って与えてくれた。しかし三日も経つと白紙のノートになっていた。余り変化のない生活であり、字の下手な私にとって、何を書いて良いか、また下手な字を見られやしないかと思うと日記は厭なものの一つ

であつた。それが五、六年前より「ワープロ」が出回り、少し文章と言うか、覚えを書いてみようか、と思うようになった。一介のサラリーマンの私は、子供達に残せるものは物質的には何もないが、私の歩んだ道や歩んだ心、感じた気持ちとをありのままに書いてプレゼントすることが、私にできる最大の贈り物と思い、時間を見ては書き綴っていた。これら子供達が古希の祝いとして、製本してくれるとのこと——もう少し文章的に手直しもしたいところもあるが、そのまま原稿を渡すことにした。あれも書いておきたい、書ければ良いが、という思いは尽きないが、小さい時に日記をつけなかった罰か、文章にするの思うに任せず己の限界を感じているこの頃である。

でも、またいつの日か「べたべた」と書きたくってみたくなるのを正夢と信じて！

(一九九四年五月一六日 記)

我が心の豎琴

はじめに

『我が心の堅琴』―なにか気取った言葉のように聞こえるが、この言葉に恥じずに私のありのままの姿を書きとどめて行こうと思う。

一九九〇年の秋の彼岸に母と本郷の墓参りをした時に、お寺の住職に、「私もお迎えが近いと思ひましてまとめています」と二冊の厚い本を戴いた。内容は、住職の生い立ちから仏教に帰依するまでの出来事を通じて、心の移り変わりを書いたものであった。また、最近、日本経済新聞に連載された『私の履歴書』の中で、聖路加看護大学学長の日野原重明先生の書かれた文章に接することができた。その両氏の文章のなかに、その時々にかきた出来事を通じて、筆者の心の持ちかたが素直に表現され、大変、心打たれるものであった。

財産や姿よりも、人間にとって一番の宝として、そして子供や孫達に、また自分を養育てて下さった方々へ感謝の気持ちを表す一番のものとして、その時々私の姿を素直に書き残したいと感じ、私の心の遍歴を書こうと思い立った。

もとより前者のような人格もなく、参考になる所も無いかも知れないが、私と全く同じ環境を生きた人はないのだから、私の環境の中で感じたものを遺すのにも多少の意味はあるのではないかと心ひそかに思っている。

小さい時のことを思い出しながら、心の旅路に旅立ってみたい。飾った身支度はいらない。昔歩んだ心の道を素直に歩み直してみよう。音痴な私でも心の豎琴は弾くことができると信じて。

幼き日の心の誕生

大正十三年五月十六日、私がこの世に生を受けた日である。東京都赤坂青山高樹町十三番地生まれ、私はこれでも三代続いた江戸っ子なのである。でも私の心の誕生日と誕生の地は、それから二年ほどたった秋の京都であった。母と姉と叔母に連れられて、母方の京都の祖母の家に遊びにゆき、姉の麻疹をもらいさらに中耳炎になってしまった。その時が私の記憶に残る心の生誕である。

古い二階家の部屋が私のにわか病室となっていた。年とった丸顔の『万財』という名前のお医者さんに見てもらったのを覚えている。また、独身だが三十歳近かった従兄弟が、その頃流行っていた『君恋し』という流行歌を何度も何度も歌っていたのを覚えている。実に私がこの世で最初に覚えた歌が流行歌『君恋し』となってしまった。出版社に勤務していた父が見舞いに来てくれたのもその時である。

そうそう京都に厄介になっているわけにもいかず、氷を桶に入れてぶっかきを作り、汽車の座席の下に入れ、耳を冷やしながら東海道本線に乗った。途中、今の吉原辺りであろ

う地の車窓から、雪に夕日の映えた実に美しい富士山を見たのをはつきり覚えている。心の中に焼き付いたあの美しい夕映えの富士に勝る景色に、その後四十数年富士山の麓にしながら出会うことができないでいるのは、思い出の美しさが現実に勝っているためなのだろうか。

東京に帰ってから、母におぶさったりして、一年近く耳鼻科に通ったが一向に良くならない。渋谷の日赤病院で見てもらったところ、即手術しないと脳膜炎になると言われ、手術消毒用の冷たい液が耳の後ろに流れながら、全身麻酔確認のために一つ、二つと勘定させられたのは覚えていいる。気が付いた時は病室に運ばれてベットの上であった。実に私の心の扉は病によって開けられていったのである。小さい私には親の心配やら苦勞など一つも解る由はなかったが、心の扉が開く前から実は大勢の方々の厄介になっていたのである。心の誕生、それは、喜びを知り、悲しみを知り、怒りを知り、嫉妬を知り、愛を知る、そしてそれらを大脳皮質にしっかりと焼き付けた時に始まるものと思いたい。その意味では私の幼い心の誕生―それは多くの人の『愛』によって誕生させられたことを感謝したい。幼い日の『我が心の堅琴』―遠い遠い記憶の彼方ではあるが、今もなお私の胸に響いて、生きていくための美しい調べの一つとなっていることを、心から幸せに思っている。

少年期 (一)

私が五歳位の時だろうか、父は出版社勤めをやめ、市電の高樹町停留所前に本屋を始めた。高樹町の生家に住む叔母の家とは歩いて十分位の所であり、私は両方を我が家のように行ったり来たりしていた。特に高樹町の家の前は、当時は車などほとんど通らず、格好の遊び場であった。よく石蹴りなどで遊んだものだった。そのころドイツからツェッペリン伯号という大きな飛行船がゆっくりと頭の上に飛んで来たのを見た。まだ飛行機もろくに見たこともない私には大きな驚きであり、しばし見とれていたのを覚えている。

また本屋の隣には松坂屋の集配所があり、そこに私より四歳位上の『すみよちゃん』という女の子がいた。左手の甲に八ミリ位のほくろのある優しい面倒見のよい子であった。よく集配のボンネット方式の小さな窓のあるトラックに荷物と一緒に乗って、配達先まで遠出をするのが楽しみであった。私にとっては最初の女友達であった。その『すみよちゃん』も、私が小学三〜四年のころ世田谷の、多摩川の見える丘に大きな庭のある家を建てて移ってしまった。二〜三回遊びに行ったことはあるが、何となく遠い人になったように感じた。二四〜五歳の頃、腸結核を患って亡くなったと聞いたのは大分後のことであった。

私には寂しい思い出の人である。

また本屋から二三分離れた所に精米所があり二五〇六歳のお兄さんがいた。その頃では珍しい映写機を持っていて、悪童達を二階に集めて、チャップリンの映画などを見せてくれた。また十六ミリ撮影機で我々を俳優に仕立てて、『物ぐさ太郎』という映画を作り見せてくれたりした。

毎月、七の日には、市電で一停留所離れた霞町のそばの鬼子母神に出る夜店に十銭銅貨をもらい買い物に行くのがとても楽しみであった。トーチガスの明かりに照らされた金魚や鉛玉、皆欲しい物だった。よく『ひよこ』を買ってきて、育てるのが楽しみだったが、やがて『ときか』が大きくなり処分に困ってしまった。隣の肉屋さんに頼んで処理してもらったが、とても食べる気にはならなかった。生きるためとはいえ、生き物を殺すという人間の残酷さを非常に身近に感じた時であった。

東京も戦災やら戦後の復興やらで、私達の育った所は跡形もなく変わって故郷をしのぶ跡は何もないが、そのころ受けた心の響きは私にとって貴いものであり、目を閉じればそこに蘇ってくるのである。科学への驚きも、友を得る大きな喜びも、多くの生き物の命の上に私が成り立っていることも、私の小さな胸に豎琴の響きは織りなして教えてくれた。

少年期 (二)

小学校入学の時がきた。昭和六年四月である。青山通りに近い、青南小学校は木造二階建てのかなり古い建物で、家から三十分位歩いた所にある。すぐ前が明治の元老、大隈重信の家であった。

親子揃っての入学式であるが、女の子の中には袴を履いた子も十人位はいたと思う。中には内気な子もいて、泣き出したりしていた。

入学して半年位たった頃、担任の影山先生が新聞を持ってこられた。それには銃を担いだ兵隊さんの写真が一杯載っていた。満州事変の突発である。漫画ではのらくろ上等兵が活躍し、爆薬を持って鉄条網を破壊した肉弾三勇士の話題が、一年生の私達の耳にも入って来た時であった。

私達の学校は明治神宮のそばにあり、一月の七日位に天皇陛下の閲兵式が毎年おこなわれた。陛下の馬車が通られる青山通りの市電の線路の上に砂が敷かれ、我々小学生は前列に並んで陛下をお迎えするのが毎年の習わしであった。陛下の馬車が近づくと「最敬礼」

の号令が掛かり、百メートル位馬車が行きすぎると「元へ」の号令がかかる。私たちは陛下を身近にお見かけしたことはなかった。

小学校一、二年の時であつたと思うが、友達の自転車を借りて乗り始めた。少し乗れると無性に欲しくなり、親にねだつたが、「危ないから」となかなか買ってもらえなかった。泣き落とし戦術で一日十銭の小遣いの前借りをして五円也の中古車を買ってもらい、颯爽と五、六人の悪童達と乗り回した。一度道路の出会い頭で自動車にぶつかってしまったが、幸い家の人には見つからなくてすんだ。幼い時の秘密、第一号である。

私達が遊ぶ場所では比較的広い場所の一つに鉄砲山があつた。それは青山墓地に近い麻布三連隊の射撃訓練場だった。二十メートル位の高さの土盛りの山で長さが百メートル位の扇形になっていた。訓練のある日には赤い旗が頂上にたつて立ち入り禁止であるが、旗のない日は自由に入ることができ、我々の格好の遊び場となつていた。

小学校卒業の前年、いつもの通り友達の家を誘いに寄ると、今朝大変な事が起きたらしいと言つていた。その子のお父さんは警視庁の偉い人らしかった。学校に着くと今日は授業は中止ですぐ家へ帰れと言う。理由は解らなかつたが喜んで家に帰つて遊んでいると、今朝、学校に比較的近い高橋大蔵大臣の官邸が、兵隊によって襲われたらしいというニュースが入つてきた。その日から四、五日学校が休みとなつた。その中の雪が降つていた日

の事である。通りで雪遊びをしていると飛行機が低空でビラを撒いていた。あの有名な二・二六事件の『兵に告ぐ』という反乱兵士に対する降伏勧告のビラであった。銃声こそ聞かなかったが、私のすぐ近くで起きた事件として記憶になまなましいものである。

そのころ義務教育は小学校だけで、中学校入学は任意制であったが、二三人を除いて殆どが中学校へ進学した。段々戦時色の強くなった時であり、工業学校を受けることにした。東京市立高等工芸学校付属工芸学校、憧れの学校であったが、二十人に一人の難関は突破できなかった。家から四十分位の東京市立麻布工業学校に入学した。

高樹町より霞町、材木町、六本木、飯倉片町と歩いての通学である。その通路に女学校が三校あった。一つは私立の東京女学館であり、『お宿題お算術とお読み方』というお嬢さん学校であった。また他の一つは市立第三女学校で、通学途中で歩きながら勉強している、女性二宮金二郎のような秀才の学校であった。学校に一番近い学校、それは東洋英和女学校である。東洋英和は通学途中歩くのは二人歩きである。そして大体話しているのが英語である。こちらの悪口を言われていてもさっぱり解らなかった。市立第三は一人で勉強しながら歩く。東京女学館は四く五人で例の敬語を使いながら賑やかに通学していた。それらの女の子の中に交ざりながら通学するのも悪くはなかった。日中戦争の起きる前のささやかな色気のある一瞬であった。

小学校入学と同時に戦争勃発、戦争を巡っての国内の軋轢（あつれき）などは、小さな私には少しも解る由もなかったが、千人針を求める人が立ち、慰問袋の話などを先生から何回かお聞きしたことにより、日本の正義の戦いが始まっているとの思いはあった。しかし、まだ実感としての戦争は心の中に無かった。だが、祝祭日の度に、礼服を着た校長先生が真っ白な手袋で、天皇陛下の御真影を飾ってある講堂の祭壇から教育勅語を恭しく取り出し、我々は頭を下げてまゝ直立不動の姿勢で聴かされた。腕白小僧の我々も、いつのまにか全体主義の中に教育されていたのであった。先生方も心から信じて教育されていたように思う。

言論の自由のない社会で生きるということは、批判が握り潰され偏った思想に陥るということを、身に染めた体験である。この時代にもっと意見が戦わされていたら、太平洋戦争は回避できたかも知れないと思うこの頃である。

一本一本の糸の張りを調整し、それぞれの糸が自分の音色をきちんと出せる琴こそ、優れた良い調べが生まれるように、私の心の中の豎琴も調整し直す必要があるのかも知れない。若き日に調整させられた琴だから。

少年期 (三)

工業学校入学して間もなくの、七月七日、七夕の日である。樫溝橋での日中両軍の衝突に始まる日中戦争が始まった。南京占領、徐州攻撃等、新聞は日本軍の勝利を大見出しで告げる日々であった。日独防共協定によるヒットラーユーゲントの来日を祝い、帝国ホテルまで堤灯行列の波が続き、私もその中の一員であった。「ようこそ、はるばる西なる盟邦……ヒットラーユーゲン、ヒットラーユーゲン」という歌もできての歓迎であった。その頃の日本中国民すべてにとって良いほど身も心も戦時一色であった。学校では教練の学科が増えて、英語の時間が減り支那語の時間が増えたりした。

その頃国民体力検定が始まり、我々学生も学校で検定が行われた。走る速さ、砲丸投げの距離、各種の重さの俵担ぎ、幅飛び等であったと思うが、私もそのテストを受けた。俵担ぎの時左足首を立てぬ程捻挫をしてしまった。新橋の方の医者に父に連れて行ってもらった所、マッサージが良いと一週間程通院したが、一向に良くならず益々痛みが増してきた。戦時色となり入院は兵隊さんだけとなった日赤病院であったが、外来は見てくれるの

で整形外科へ行くと、その部長は小学校の友達のお父さんで、遊びに行つて二、三回お目に掛かった人だった。レントゲンを撮って見ると関節結核の恐れがあるとのこと。膝から下を石膏のギプスで巻かれてしまった。松葉杖では学校へも行けず一月休むことにした。

幸い、足をつかなければ痛みは無かったが、その一ヶ月が長かったこと、長かったこと、ようやく再診察の日がきて母が付いてきてくれたが、再診察の結果はやはり足関節結核とのこと、また重いギプスを巻かれてしまった。ギプス治療で最低三年間はかかるとのこと、それが我慢できなければ手術するしかないとのこと。三年間はとても我慢ができぬと手術をたずねたら、それは足首より切断することだった。義足でも何ともなく歩けるとのことだったが、治る当てがあるのに、切断する勇氣はさすがになかった。

三年という年は長いものである。ギプスでは当然学校へも行けぬので休学となり家での療養になる。そのころの中学校では軍隊の延長のようなもので、下級生は上級生に絶対服従であった。その下級性の下になるのである。死にたくなるほど厭であつたが我慢するほかなかつた。

二、三ヶ月したら今度は腫れた所から皮が破れ膿みが出てきた。ギプスに円い穴を開け毎日病院で包帯交換である。幸い日赤は松葉杖でも一五分位の所であつたが、これから先どうなるか解らない、重い暗い気持ちの通院だった。もちろんその頃は健康保険等なく、

全額自己負担であり親不幸したものである。病院から帰ってくると重い足を、うっ血しないように机の上に乗せ、教科書を開いて見ても身には入らない。庭の杉の木を眺めたり、空の雲を眺めたりの日である。

あるとき、いつものように松葉杖で病院へ歩いている時に、後ろの方からハイヒールを履いた女の人の駆けてくる足音が近づいて来て、私の所でびたっと停まった。そのころハイヒールを履いている人はまだ珍しかった。何かなと思っていると全然見知らぬその人は、病状等色々聴いてくれ、その人の知り合いの人が治ったから気を落とさず元氣を出すよう励ましてくれた。

その時私は他人を強く意識した。私は今まで他人に何をしたのかと。何一つせず自分だけの思いで紆余曲折していたことに、目が覚めた思いであった。

本屋をやめ元の出版社に戻っていた父が、よく自然科学の本を買ってきてくれた。特に雪とか雷とかの、座っていても観察できた本は今も心に残る本である。

半年毎にギブスを替え、レントゲンを撮る時に久し振りに見る自分の足、特に『すね』の細くなったこと、持つとぼきんと折れそうな足である。一方健康な足は人一倍使うので前よりずっと頑丈になっていた。約束の三年ほどたったなら膿みも停まり、ひざから下の編み上げ式の補助機に替えることができた。

思えばその間、昭和十五年には紀元二千六百年の祝賀行事などあったが、家で新聞を見る程度であった。また昭和十六年十二月八日の第二次世界大戦の勃発など、日本は大変な時代に突入していたのである。

補助機になって多少歩けるようになったので学校に手続きをしてもらい、三年に編入することができた。前に在学していた時にはまだいなかった生徒達である。弟のような人達と机を並べての学習である。先生もクラスの人達も皆親切にしてくれた。でも戦争は学校にも大きな爪痕を遺していた。まず先生が大分兵隊に取られていった。早稲田理工出の流体力学の得意な先生もいなくなった。在学生の中からも予科練に志願して、全校生徒に送られて行くものも出てきた。

私は補助機で徴兵検査を受けた。小学校の友達も何人か共に受けていた。審査官は私に「丙種合格とする。銃後でしっかり励んでくれ」と言われた。大分年をとった将校のようだった。覚悟はしていたものの身の引き締まる思いで審査場を出てた。病弱な私も二十歳になった時であった。

成人（一）

補助機で学校に行って一年位たってからだろうか、お医者さんから「自分の足で歩いて良い」と許可がでた。歩くのは四年ぶりである。父がどこからか直径三センチ位ある物凄く丈夫なステッキを買ってきてくれた。秋の頃だったと思うが、日中は恥ずかしいので多少薄暗くなった高樹町の道を母に傍らを支えられながら、足をそっと地面に着ける。殆どの体重をステッキに懸けながら五十メートル位歩いたが、全身汗びっしょりであった。自分の足で歩く―当たり前のことながら私には言葉には言い尽くせぬ大きな喜びであった。健康な他の人にはとても味わえない喜びである。平凡な『歩く』ということが！。私は、青春の最も多感な時に病気をしたのである。

足がどんどん悪くなって行った時のあの重い気持ち、どうしようもない暗い気持ち、でもそれを救ってくれたのは、肉親の支えと共に三年たっても遠くから見舞いに来てくれた友達、病院のお医者さん看護婦さん、そして見ず知らずの他人の励ましであった。

病氣中読んだ本に「病氣はその人にとって大いなるマイナスかも知れない。でも病氣を

通じて何かをその人が得るならば、病気はその人にとって最大のプラスでもある」という意味の言葉が書いてあったのを覚えている。私にとって自己中心のだった自分から他の人に目を向ける、いや他の人の存在を知る心を与えられたのは、私にとっては大きな幸いであり目覚めであった。病を得たおかげである。

私が病気をしている間に、大東亜戦争が起こり西太平洋に南太平洋に血みどろの戦いがおこなわれていた。大本営発表ではいつも華々しい日本の戦果を告げていたが、学校の友達がミッドウェイ海戦で日本が大敗したと言っていた。兄貴が新聞記者だったらしく、重要秘密も漏れていた。

学徒動員がどんどん行われていった。私も四年の終わりごろから、蒲田駅に近い所にある日本内燃機KKに学徒動員としてクラスの友達と行くことになった。渋谷から東横線を通い出したが物凄い混みようで片足を上げたら、絶対降ろす所がなく、片足で体を支えながら電車に乗っている有様であった。職場は足の病気のこともあり、治工具設計部門に友達と二人で配属になった。

工務部長の『野添』さんという方は機械学会のハンドブックの編集にも携わった方で、工具形状など表す式を親切に教えてくれたりした。また設計主任の『関』さんは、そのころ機械学会誌で発表になった転位歯車の話など暇があれば良くしてくれた。私はそのころ

から鹵車との付き合いが始まっていたのだ。内製の生産フライス盤を設計するのであるが、刃物の切削方向と製品送り方向が同じにして切削するダウンカット方式のものにするとのこと、送りねじの『がた』を除去する方法の調査を頼まれ、虎の門の特許局に行つて二、三の方式を調べたりした。切削工具のホブやブローチなども内製しており私には大変勉強になった動員であつた。

戦局は勇ましい発表に拘わらず日本に不利になっていった。仕事をしていても、空襲警報がよく鳴るようになり、そのころの唯一つの計算機であるタイガー手回し計算機を持ち、防空壕に逃げ込んで、空を飛んで行くB29を眺めたりした。迎え撃つ高射砲の弾は、はるか下の方で炸裂していたのが多かった。零戦のような戦闘機がB29の回りを飛んで、苛烈な戦いをしているらしいのを時々見ることもあつた。でも私は巨大なB29の撃墜をついに見ることはできなかった。

かわいがつてくれた高樹町の叔母が亡くなった。動員先にいた私は死に目に会えなかつた。毎晩のように空襲のある、昭和十九年の暮れも押し迫つた時であつた。

卒業も間近になつた昭和二十年三月十日、東京下町方面に、夜の空襲があつた。東の方の夜空が真っ赤になっていた。江東地区が全滅で死体が累々としていたと父が後で話してくれた。でも戦争の中で『死』というものに、あまりにも感受性が麻痺していたためか、

悲しみとか、怒りとか、次に自分達に迫っている危険だとかは強くは感じなかった。

木造の麻布の母校もその頃焼け、青木校長先生も殉職されたと伺った。優しい良い先生であった。私たちは卒業式もなく、卒業証書もない卒業であった。

『病氣』、『復学』、『動員』、『多くの人の死』、私にとってはその変化に振り回された青春であった。悲しみも多かった。苦しみも多かった。でも喜びもちゃんと用意してくれてあった。私の一生の中で、一番変化の激しい時であったかも知れない。でも日本の国はもっと大きな変化を迎える時であった。

我が心の堅琴よ、青春の二度とないこの時の調べをいつまでも響かせて欲しい。人と共に喜ぶ喜びを、人と共に悲しむ悲しみを、怠惰になり鈍感になりがちな私の心に。

成人（二）

卒業して就職したのは、日産自動車である。それも静岡県吉原工場であった。そのころは日産重工業といていた。

四月から就職し働くつもりが、一向に出社通知がこない。四月の終わりに近かったと思うが、問い合わせしてみると、とくに通知は出してあるとのこと、郵便事情の関係で未着のようである。五月の初めから出社することにした。

赴任の日である。まだ電化されてない東海道線の沼津駅をガクンと一揺れして十分停車の汽車が出た。連結器のそばに立っていた私は、後ろに飛んで行く線路の石を見つめながら、肉親を離れ、東京を離れた、という実感が心の中に脈々と湧いていた。男として自分の定めみたいなものを感じた時であった。

就職して希望の治工具設計に配属になった。課長は『西宮』という優しい面倒見の良い人であった。また東大出の『清さん』というなかなか面白い人もいた。寂しさを忘れる日々であった。吉原工場では航空機用エンジンの製作組み立てである。南側のテスト場には

六基程のテストターのエンジンが、プロペラを回しながら物凄い音を起てていた。戦地に行けない私は、航空機の心臓の生産に関与することで戦地に行って非常な苦戦を嘗めている友達との、せめてもの連帯感を感じていた。

出社して二十日余り立った、五月二十四日の日である。父が突然尋ねてきた。五月二十二日の夜の空襲で高樹町の我が家も借家も全部焼けたとのこと。幸い道路を隔てた家が焼けなかったので家族はそこに避難しているとのことであつた。とりあえず父と翌日東京へ行ってみることにした。

父を旅館に残して自分の部屋に帰るその晩も、B29の編隊が富士山を目掛けて飛んでいた。朝まだ暗い内に駅にいつて割り当て枚数の少ないキップを行列をして手に入れた。私のポケットには、出社しなかったが支給された四月分の給料と、五月分の給料とが、一つの袋に入っていた。生まれて初めてもらった給料である。

汽車は途中駅で度々停まりながら、新橋駅についた。そこで下車したが、一面の焼け野原である。交通機関は何もないので父と歩いて行くしかなかった。溜池、六本木、材木町、高樹町と約一時間半位歩いたが、石の土蔵がポツンとところどころに残っているだけで木造の焼け残った家は一軒もなかった。焼け野原の距離は見通しが効くためか、非常に近く感じた。高樹町の我が家の跡に立つ。瓦やら焼けトタンが一面に散らばっている。道を隔

てて焼け残ったという家も丸つきり焼けて跡形もない。防空壕の上にかぶさっていた焼トタンの下から母と弟が出てきた。父が富士に来て泊まった晩の二十五日の空襲で、一旦避難した家もまた焼けていたのである。

一・五キロ程離れた広い庭のある根津邸の池の水を浴びたりして、命拾いをしたようである。ともかく我が家の両親と弟二人は無事であった。時に昭和二十年終戦の年である。焼け跡で食糧も手には入らぬ東京にいるわけにもいかず、幸い熱海の岡本旅館を会社が買収して家族寮としており、そこに入れてもらうことができた。部屋の広さは十畳と八畳ぐらいの二間であったが、二度の戦災で何もない我が家には広すぎる位であった。

私は熱海からの通勤となる。駅まで三十分、熱海・吉原間は、当時汽車で一時間かかり、吉原駅から会社まで鉄道がない時代で、二十五分の歩きとなる。片道一時間五十五分かかる道中が待っていた。空襲が益々ひどくなり、帰りの上り列車の遅延はひどかった。二十分位は良いほうで二百分遅れのこともあったが、待ち切れず、客車の間にくる貨物列車の連結機の所に立って帰る時も時々あった。駅員も見逃している時である。当時は石炭を炊いて走る汽車である。丹那トンネルなどを通して来ると顔に煤が一杯着いていた。でも岡本に着くと、ザーザーと出る温泉が迎えてくれていた。七く八人は一度に入れる風呂であった。男、女の入浴時間帯を多少ずらす取り決めもあったようであるが、良く混浴になっ

たりしていた。温泉街では当たり前で、珍しいことではなかった。

疎開で建物の無くなった所から、温泉の蒸気が吹き出ていた。そのうちにお米の代わりに配給された大豆を『せいろ』に入れて誰かが蒸しはじめた。一つの蒸気口の上に『せいろ』を次から次へと重ねて、八段位重ねて使っていた。当初は重ねると人はいなくなっていたが、食糧がだんだんと不足してくると自分の『せいろ』がなくなるようになり、蒸し場は待っている人で一杯になっていた。私も顔なじみの人が少しできていた。

私が入社した頃はまだ立派な松並木が揃っていた東海道の道筋であったが、間もなくどんどんと切られていった。直径三十センチもあるような大木が切られ山積みになっている。航空機の潤滑油を取るためである。

またその頃は木炭バスが走っていた。後ろに直径五十センチ長さ一・五メートル位の円筒をしょっていた。そこに五センチ角長さ十五センチ位の材木を入れて蒸し焼きにするのである。出てきたガスを燃料にして走るのであるが、木炭をおこす『ふいご』のハンドルを運転手さんが回したり、力が足りず時々山道では客が後押している風景を見たりした。

橋の欄干の『ぎぼし』が金属でできていると、砲弾などを作るために供出させられてなくなっているものが多かった。神社の鐘も由緒あるものが供出させられているようだった。その頃より少し前であったかも知れないが、敵軍の捕虜の働くのを見て『おかawaiiそうに』

といったある少女のことを、軍部やジャーナリズムが盛んに非難していたが、心を感じたことを素直に表現できない世の中は、廃れる運命にあったのかも知れない。

一方「欲しがりません勝つまでは」の標語は街のいたるところに書かれていた。竹槍で原爆に勝とうという、軍部最後のあがきであったのかも知れない。熱海には焼夷弾は一発も落とされなかった。計画された米軍の作戦である。

八月六日の広島原爆投下は、新型爆弾が投下されたと新聞では報道されたが、翌日位には原子爆弾らしいと噂はすぐ口伝えに入ってきた。重たい雰囲気が漂っていた。それから二日後、日ソ不可侵条約を結んでいたソ連が参戦し、満州へ怒濤のごとく侵入した。長崎への原爆が投下されたのは、それから一日おいた八月九日であった。

終戦前の混乱しきった世の中であった。吉原工場は殆どが中学生の動員学徒で占められていた。能率はがた落ちであった。我々も熱海から通うのが精一杯の時代であった。物事に感じ、心に問う余裕は無かった。ただ流されている期間であった。東京の学校の友から手紙をもらった。鬼畜米英に対する憤りが書いてあった。友の身を案ずる日々であったが、私にはどうすることもできなかった。

大東亜共栄圏という大義名文を掲げたこの戦争も終わろうとしていた。東亜の多くの民衆を苦しめ、国内では多数の同胞の命を奪い、財産を焼き、故郷を捨てさせる結果となっ

てしまった。本当に戦争の真の意味は何だったのだろうか。全体主義の名目の中に個人の自由、個人の人格が押し潰された時代であった。物質の豊かさを追い求めた戦いに勝利は無かった。『我が心の竖琴』は戦いに費やした青春の空しさを、友を失った悲しさを、何時までも私の心に響かせている。寂しい、悲しい、青春の時代であった。

生きる (一)

昭和二十年八月十五日 吉原工場に何時ものように出社し仕事に入っていた。天気の良い暑い日であったと思う。正午に総務課前に集まるようにと連絡が入ってきた。何事だろうと集まるとラジオが一つ台の上に置いてあった。工場派遣の技術将校を始め、工場長がラジオのそばに集まっていた。重大発表があるとのことである。多分内地にも敵軍が上陸するだろうから、全員一丸となって鬼畜米英に当たれ、との詔書が発せられることかと思っていた。天皇の特徴ある声で詔書が流されたが、雑音が多く殆ど聞き取れない。放送が終わって、配属将校が怪訝な顔をして引きかえして行った。我々も何だか解らず仕事に

付いたが何となく落ち着かぬ一日ではあった。翌日全員が集められ工場長の挨拶があり、しばらく自宅待機をしてほしい旨話があった。天皇陛下が終戦を宣言し、無条件降伏したのである。

古事記やら神皇正統記を学校で学び、現人神（あらひとがみ）の天皇を中心に、一億一心の思想統一で、教育勅語を倫理の中心としてきた我々には敗戦は考えられないことだった。敵が上陸してきたら、一億火の玉で戦うものと思っていた。九州は敗戦せず、独立して戦うとの情報も流れたりした。ともかく私にとっても大きな衝撃であった。

敗戦になって、灯下管制が解除になった。熱海の岬のほうから夜の町を見た。熱海の山の上の家まで明るい灯がともっていた。暗闇から光へー平和というものを実感した時であった。電灯を覆っていた黒い布が外され、戦闘帽と巻ゲートルと軍刀から、おさらばした日である。平和、勝ち取った平和でなく、負けて得た平和である。女性は犯され、男性は去勢され強制労働に連れていかれるーというデマが飛んだ。でもそれは我々にはデマとは思えなかった。「日本が負けたらそうなるのだ」と日本の軍人に教えられていたからである。

マッカーサーが八月末に厚木飛行場に到着した。一部女性は田舎に疎開し、家に閉じこもっていたようである。熱海にもジープに乗って米軍がきた。でもなにも被害は起こらな

かった。我々が教えられ、考えていたよりも、ずっと紳士だった。

物価がどんどん上がっていった。一升五十銭位の配給米が、闇で七十円、砂糖一貫目千円位である。当時われわれの給料は五十円位であった。一ヶ月働いて闇米一升買えないのである。農家とサラリーマンの戦いが始まった。衣類が芋に変わり、私も配給のタバコを結構芋に変えていた。平和を勝ち取った日本国内の戦いである。

吉原工場は賠償対象工場となり、機械リスト等の英文書きが始まった。各機械には賠償対象機械のリストの札が掛けられ、今にも持ち出されそうな気配だった。日本で機械工場など動いてない時であった。十月頃のことと思うが、ダットサン・トラック製造の許可が、マッカーサー司令部のGHQから発せられた。工場にも新たに人が入り活気づいてきた。でも米国の自動車産業の強大さを思い日本の自動車産業は成り立たないと、見切りをつけ田舎に帰っていった人もいた。誰にも日本の将来は解らぬ時代であった。東京には闇市が出て、お米やらお酒、甘い菓子など、お金さえ出せば何でも売っているようであった。

吉原付近からお米やらお茶など、大きな荷物を担いで闇市に売りに行っていた。我々の給料など一、二回行けば十分稼げるようだった。何のために生きるのか、何のために働くのか、職場でよく議論したことがある。今我々が物を作らねば日本はどうなるのかと、すき腹に鞭打ちながら言い聞かせていた。闇市には山のように物があきながら、配給の食

糧ではとても持たなかった。汽車のキップも自由に買えない時である。定期を持っていた我々は休みの日となると、お芋の買い出しに函南などにゆく日課であった。福井の親類からお米が送られてきて皆で大喜びをしたのもこの頃である。会社で薬をメリケン粉で固めて焼いたパンが配給になったこともあった。なにしろ白いご飯をおなか一杯食べたかった。食糧難とインフレで生活は苦しい時代だった。でも家族という喜び、平和の喜びは掛け替えのないものだった。

その頃そろそろ大陸から復員が始まった。汽車は電化されておらず、客が勝手に開け閉めする手動のドアであった。復員兵は、大きな荷物を持って引き上げてくる。網棚の上まで人が乗っており、出入りは窓ですることも多かった。我々は身軽なので、ドアの取っ手にしがみつき、蜜に群がる蟻のようにへばり付きながら、背中を架線の電信柱にぶつけぬように注意しあい通勤したものである。

軍隊の服を着た復員兵には、嘗ての階級を誇っていた星やら金線の肩章は何もなく、もちろん、威風を誇っていた将校の軍刀等見るすべもなかった。

人生何が幸福になり、災いになるか解らぬものである。足の病気がなかったら、確実に軍隊にとられ大陸で死んでいるか、海の藻屑となっていたのである。あの、厭で厭でたまらなかった病気が、私の命を救ったのである。この私にも生きて何かをしなければならぬ

と、神様が言われているのかも知れない。

生きる (二)

終戦の翌年である昭和二十一年の夏頃、ダットサン・トラックの一号車を作ることができた。フロントガラスが平面でドア回りは、木の柱でできており、ドアの窓の下部分はベニヤ板でできていた。そんな車でも戦後の物資輸送に無くてはならぬ物となっていた。価格は当時の物価としては家が二軒位建つほどの値段で三万五千円位であった。食糧は益々厳しくなり当時数十万人が餓死するだろうと言われていたが、アメリカからの緊急輸送による食糧が入ってきた。お米の変わりにメリケン粉がよく配給された。

当時は日本の工場が殆ど動いておらず電気が余っていたので、暖房はニクロム線の火鉢であり、また、特殊な家庭用のパン焼き機を売っていた。それは電線のついた二枚の鉄板を五センチ位離して立てられるようになった木枠があり、鉄板を立ててその中に野菜やら何でも食べられそうな物を、メリケン粉と膨らし粉で練って入れるのである。電流が水を

含んだ中を通る時の抵抗で、熱が出てほど好く焼けるのである。

またタバコが成人男子の数だけ配給になったが、紙で巻いてなく、紙だけ別に配給になるのである。そこでタバコ巻き機が家庭に登場し、手巻タバコである。量が少ないので好きな人にはたまらないらしく、通路に落ちている『ちびれた』飲み捨てを拾っては吸っていた。私は吸わないので農家で芋と代えていた。吸うタバコを食べて生きていたのである。食糧と共に物資不足も深刻で、特にタイヤが不足して、タイヤの着かない車が工場のあるこちらに置いてあり、生産が予定どおりできず、日産も金繰りに困っていたようである。二十三年の春頃と思ったが、我々の住んでいる熱海の岡本旅館を、元の売り主に返すので立ち退きを迫られた。確か当時七十万円で売ったと思っている。

食糧難もあり、日本の前途も定まらぬ状態だったので、九州に土地を求め農業をしようとして、父たちは母と弟二人を連れて旅立った。私はまた一人暮らしになったのである。熱海は他の都市より物価が高く、サラリーマンには住む所でないかも知れないが、住めばなつかしい町であった。あの年中入れるお風呂の味は、今も忘れられない。

会社が不況になり、二十四年の秋、人員整理が行われた。首切りとは厭なものである。

勤務成績の悪い者、配置転換が困難な者、勤続年数の浅い者、休職者、扶養者のない者、等の基準が出されていた。当時組合が強く、個人宛には通告を出させないで、組合で一括

受け取り職場長が職場大会で発表した。組合は全部はねつけるつもりでいたと思う。しーんとした職場大会で氏名が発表された瞬間、安堵の胸をなで下ろす雰囲気が一瞬漂ったが、該当者は驚きの余り泣き出していた。まじめな設計の女の子であった。誰が見ても不合理に感じた。当時は課長まで組合員だったため、部長が何百人という部下のことは良く解からなかったためと思われた。部長を呼んできて説明を求めたが、絶対に変更はしなかった。その後組合は一月ばかりで争議を妥結してしまった。首切りは撤回できなかった。苦しい思い出である。

独身寮である吉原の眺峰館に住むようになった。現在の関文具店の所である。六角の塔の二階であるが押し入れが無く、布団はたたんで畳の上に重ねるしかなかった。三階には現在富士重工業社長の『川合さん』がいた。寮では毎年忘年会が行われたが、皆なかなか芸達者で、上半身裸になり、そのころ流行った『いい湯だな』など歌ったり踊ったりしたものである。食糧は無かったが、独り身の気楽な一時であった。

九州から電報がきた。『父死す』とのことである。キップもなかなか手には入らず、死に顔を見ずに葬儀は終わっていた。心臓麻痺であった。弟たちはまだ高校生であり、九州を引き上げることにした。一足先に帰る汽車は、引き上げ者で一杯であった。夕方の瀬戸内海は夕日に映えて奇麗だったが、汽車の入り口で吉原まで『ちんぽ』であった。

戦後はまだまだ終わってはいなかった。社会もそして私の心も。ゆったりとした気持ちで、また瀬戸内を見ながら父親の思い出などに耽りたい今日この頃である。

終戦という大きな出来事はまた私の心を大きく変えたこともある。それは小学校入学より終戦まで心の支えであった教育勅語が、昭和二十一年の『人間天皇の詔書』でまるつきりなくなったことである。生きるというのは何のためなのか、戦争中は天皇陛下のため、死も辞せずという信念で凝り固まった私たちである。敗戦による闇市でのぼろ儲け、不当利得、天と地が逆さになったようなものである。心の支えを失った私もまた、自分自身が怖かった。

昭和二十四年の時であった。元の吉原小学校で賀川豊彦氏のキリスト教に関する講演会があった。暇に任せて行ってみると、三階の『川合さん』が宣伝のビラ撒きをしていた。講堂一杯の人が入っていた。活発な質問など飛び、皆心の飢えを感じているようであった。それから少しして教会へ行ってみた。日産の人も四、五人礼拝にきていたが、何の予備知識もない私には良く解らなかった。半年位行っていると大体解ってきたが、同じことの繰り返しのようなお話に聞こえて、一年ばかりご無沙汰した。だが、ひょっこり牧師に街角で会い、また行ってみた。すると同じことばかり言っているとと思っていた話が、私には新しく聞こえたのである。変わってないと思っていた私の心は、やはり変化していたので新た

に聞こえたのであった。キリストによって私の弱い心を支え、心の中に巢食う惡に立ち向かう力を得ようと、昭和二十六年に受洗した。カトリックの信者である中山姉妹からお祝いの手紙を戴いた。宗派の違う方からの手紙にひどく感動した。私には、やはり心の支えが必要だったのである。苦しい時にも、喜びの時にも！

それから少したってまたまた病との戦いが始まった。左腎臓結核との診断で急ぎ手術し、摘出が必要とのことである。両方に感染したら死を待つばかりである。見つけてくれた日産病院で手術を受けることにしたが、約二千ccの輸血が必要で、職場のO型の人が十人程来てくれた。採血して暖かい血液が私の体の中を巡った。私はまたも生かされたのである。

昭和二十五年に勃発した朝鮮動乱により、景気は急上昇したが、全自動車労働組合に属する日産労組の百日闘争は本当に凄いものであった。工場長を始め部長を一部屋に閉じ込めたり、当初はまだ組合員だった課長に対する吊しあげ、「暴力は止せ」と言った組合員に対する非難等、やはり組合活動を逸脱するものであった。新組合ができて、旧組合員へのオルグで私も吊しあげを受けたりした。

その頃は、娯楽といっても余り遊びに行く所はなかった。冬は有志の呼びかけでよくスケートをしたが行ったが、スケート場は天然の湖である。正月などのスケート合宿は、夜は

一つの『こたつ』に放射状に洋服のまま寝るのである。外はマイナス十二度位で、翌日のコンディションは最高であった。また我々が主催していた講座班でスクエアダンスの講習会を定時後行い、テキストを片手に課長から部長まで引っぱり出して手をつなぎ輪になって踊ったりしたが、皆、子供心に帰っての楽しい一時であった。講師は陸士出身で後にラリーのドライバーになり日産観光の社長になった。

人間が生きるといふことは、特に私達の時代は大変であった。生きる目的が見いだせない、食べ物もない時代、でも何とはない心と心の触れ合いが、我々を救ったのではないかと思われる。家庭での心の暖かき、職場での心の触れ合い、教会での祈る心、リクレーションでの笑いの暖かき、私には掛け替えのないものがそこにあった。それは今も私を取り巻いて、生かしてくれている。

結婚

嫉妬は恐ろしい、嫉妬は愛に似ている、しかしそれは正反對だ。

嫉妬は相手を独占し、自己を中心とする。

愛は総てを解き放ち、己を無にするものだ。

結婚前に読んだので少し言葉は違っていると思うが、『アミエルの日記』の一節である。昭和三十年前後は西田幾太郎の『善の研究』とか、『三太郎の日記』などが良く読まれていた。七、八人の仲間で多少哲学めいたことを話しあったり、詩やら短小説を作って批判し合ったりしていた。結婚に就いても話し合うこともあったが、私は自分の幸せは自分で見つけ、生み出していいこうと思っていた。できるだけ人の世話にならずに、自らの力で無から作り出して行こうと思っていた。

結婚を申し込むことについては、財産もなく学歴もない私が、相手に対してどうして「誰にも負けずに幸せにしてみせる」と言えるかと思った。「愛は己の利を求めず」と聖

書に書いてある真理と、相手を恋い慕う気持ちの中に出てくる己との関係が複雑に絡んでいた。好きだと思っている人が、私より学歴もあり財産もあると思われる人の所に嫁にくのに、立ちはだかるのは本当の愛なのかと悩んだ時もあった。去り行く人を見送るのは、寂しいことではある。でも私の心に濁りは残らなかった。これで良いのだと自分に言い聞かせていた。それではどうして結婚して欲しいと言えるのだろうと思った。自分も結婚したいと思い、相手も自分と結婚することを本当に望んでいる時に、自己中心でない愛が存在するのだと思った。私には男らしい奪う愛は、とれなかったのである。

幸いグループでキャンプにいたりスケートにいたりして、気心の知れた愛子と結婚することができた。仲人は愛子の上司でありクリスチャンでもある総務部長にお願いした。式の前に二人で式場の掃除に行き、床を拭き花を飾った。式のプログラムは下の弟が刷り、式のウエディングマーチは上の弟が演奏した。結婚式場はもう取り壊された古い木造の吉原教会の会堂であった。せめても幸せを自らの手で作りだそうとした家庭の始まりである。

二人の人間が一つの家庭を築いていく。育ちも違い考え方も異なる者が二人で幸せを求めていく。本当の愛の心が無かったら、長続きはしないであろう。心と心の結び付き、それは顔形でもなく、財産も学歴も条件にはならないものであろう。

本当の幸せのために、己の澄んだ豎琴の音を鳴らし続けて行きたい。

家庭（一）

六畳と四畳半と一坪の台所、一坪の風呂場、僅かの縁側とトイレ、隣と境のない庭、八軒長屋の社宅、これが私達の新婚生活の砦であった。三十二年五月三日からの独立した生活の始まりである。

カチャ、カチャ、カチャと二十回位空気を煽るポンプ、マッチを近づけるとガス状になった石油に炎が付く、ガスもプロパンもない時代の石油コンロである。電気冷蔵庫なるものはもちろんまだ無かった。

我が家の風呂場には、楕円系をした木製の風呂桶があり、まきを燃やしての風呂である。そのころようやく出回ったのが電気洗濯機であり狭い風呂場に居座っていた。絞るのは二個のローラーの中に洗濯物を挟みハンドルを手で回し、ローラーの圧で水分を絞り出すのである。それでも電気製品の走りであり、我が家の電化の始まりであった。そのような社

宅であつたが、会社へは予鈴のサイレンが鳴ってから出掛けても、充分間に合う位置にあり、終わるとすぐ家にいた。狭い我が家には、西洋人形が飾つてあつた。床の間もない部屋であるが一輪差しに花も生けてあつた。平和な静かな新婚の一時である。

三十三年五月四日、長男俊一の誕生の日であつた。狭い我が家が大きな泣き声で一杯になつた。庭に二本の丸太を建てて三段重ねの物干しを作つたが、いつもおしめの満艦飾である。紙おむつなど影も形もない時代である。洗濯機は朝に晩にフル回転で回つていた。

狭い二部屋の中で泣く子供の声に、私は一ヶ月程寝不足で悩まされた。人の親となるのは大変なことである。でも赤子の顔は笑っているような怒っているような、変化にとんだ表情をする。幾ら見ても見飽きなかつた。

そのころ私は試作関係の技術を見ていたが、日産で初めてのトルクコンバーターを作りあげる時だつた。ヘリカルスプラインを作るためのヘリカルガイドもカッターも間に合わず、相手に合わせて手仕上げで作りあげたりしたが、結構問題なく回すことができた。納期ぎりぎりの十一月三十日であつた。量産のためのヘリカルガイドを作る機械、ヘリカルブローチを引くヘリカルブローチ盤の設計などまだ日本にも少ないものを手掛けて勉強になることが多かつた。

長男が誕生を迎え伝い歩きをする頃、割に体格が良かったせい、腕白だったせい、か台

所の障子の紙はもちろん障子の棧も下の方は無くなっていた。私達で終わりになる社宅であつたし、あまり怒らないで育てたせいなのかも知れない。お風呂の釜炊きなど、愛子は良く長男をおんぶして、火吹き竹で『まき』に火を着けていた。

また社宅は低い地にあり、会社と社宅の中間にある和田川がよく氾濫し、床上やら床下に浸水して畳等を揚げなければならなかったが、会社の仲間が膝まで泥水に浸かりながら、手伝いに良く来てくれたものだった。

庭に垣根もない隣近所の人達は、新米の両親のためにかたく教えて戴き、また遊びに来た女の子なども長男をおぶってよく子守り等をしてくれていた。社宅の良い一面であつたと感謝している。三十五年七月五日次男が生まれた。「それ信仰と望みと愛とは限りなく残らん、そのうち最も大いなるは愛なり」という聖書の言葉から『望』と私が名前をつけた。我が家は二人の男の子で大変な賑わいになってきた。冬には愛子の手にあかぎれができていた。

三十七年の頃だと思うが今までいた所に独身寮が建つので、それぞれ社宅やら家を建てて引っ越すことになった。我が家は砂山の社宅に引っ越すこととなった。水害の全然危険のない砂の上の家である。ところが引っ越した翌日長男が突然引きつけを起こした。医者がどこなのか全然解らない、隣に泣きついて教えてもらい、背負って駆けつけた。幸いじ

きに戻り治ったが慌てに慌てた一時であった。紫外線に急に当たり過ぎたためらしい。

そのころ会社に自動車クラブという文化サークルがあった。まだ自分の車を持てる環境でなかったので、サークル員に会社が有料で自動車を貸してくれる制度であり、時々友達と借りてドライブと洒落たりして運転の腕を磨いていた。その頃は渋滞も無く、ガソリン代は一リットル二十二円位であったので、ドライブは待ち遠しいものであった。最初の遠乗りは、会社の同僚と三人で富士五湖一周であった。

三十九年の初頭、間もなく生まれる三人目の子供のために、中古車を二十二万円で買った。私には最初の車である。砂山の庭に屋根だけのガレージを手作りで製作した。

三人目は女の子であった。三十九年二月二十九日、閏年二十九日生まれである。生まれた時から嘘はつけないと、そのまま届を出す。四年に一度の誕生日、女の子だから何時までも若くいてほしいものである。愛子が幸美と名前を付けた。腕白坊主二人の後に女の子とは、うまく授かったものである。中古車は退院などにフルに働いていた。黄色いブルーバードであった。

親として

三児の親である。「育児方針はこうあるべきだ」などと堅苦しいものは我が家にはなかった。いや作る余裕などなかったのかも知れない。でも私は私の経験から次のようにしたいと思ひ努力したつもりである。

一、子供の伸びる能力を妨げるような怒りかたはできるだけしない。
言い換えるとできるだけ子供の自由を尊重してやろうと思った。

二、親の形に合わせた子供にはしたくなかった。
親以上に伸びて欲しかった。

三、余り小さな事を叱らずに伸び伸びとした子供に育てようと思った。
多少伸び過ぎた、きらいがあったかも知れないが。

四、高校卒業位までは社会や自分を見つめる力が不十分と思えるので、それから自分で進路が選べるような教育をしたかった。

私の経験から、自分の考えがはっきりするのは、高校生位になってからと思い、それまでは自由度を遺してやりたいと思った。

五、社会の弱い者を感じずる者となって欲しいと思った。

これは社会事業をしてくれという意味ではなく、弱い者を常に意識の中に置いた人となつて欲しいという意味である。

六、人と人との交わりは、誠意と愛であることを教育したかった。

幸い三人とも教会学校に通い、その辺は学んでくれたと思っている。

七、子供たちもこれから遭遇するであろう様々な出来事の中から、自分にプラスになるものを汲みとって行ってほしい。苦しみの時であっても楽しみの時であっても。生きる逞しさと共に自分を事に当たって高めていって欲しい。

以上私が子供を育てる基本として、心に刻んでいたことであるが、個性を発揮して、それぞれ自分の選んだ道を歩んでくれていることを感謝したい。子供が生まれた時は、戦争もすんで社会も多少落ち着いて来た時であったが、今のように物の豊かな、何でも揃っている時代ではなかった。必要に応じて整えて行った時代である。子供のためにはそれが良かったことと知っている。今何でも整えられた物質の豊富な時代に生きる孫たちに、物の貴さを教える事の難しさを感じている。時代に合った、環境に合った教え方がまたあるのだろう。

人生を考える

先日テレビで、北海道の無医村に五十歳を過ぎたと思える女医さんが赴任されたのをドラマスペシャルとして放送していた。その女医さんの医者になる動機は、ある日テレビで見た年取った医者が自転車漕ぎながら往診に行く姿であった。あの年取った医者の行く

先には患者さんが動けず待っている、それに答えるために坂道も厭わず自転車漕ぎ続ける医者、あの医者には待っている人のいる人生がある。私もあのような人生を歩みたいと三十歳を過ぎた主婦が勉強しだして、医大に入り卒業して医者になったのであった。夫がおり、ある程度成人した子供もいる大阪の家庭である。北海道に赴任するには家族を残して行かねばならない。ご主人も娘さんも夏には北海道に行けると喜んで送り出していた。北海道の無医村で今も続けておられることと思うが、『待っている人のいる人生』―本当に素晴らしいと感激した。ご本人も家族もテレビに出てくるよりもっと不自由なことの多い生活をされていると思うが、頑張っている人生に学びたいものと思った。

幸福とはどんなことなのだろう。物質で満たされるものだろうか。私にはそうは思えない。幾ら物質があってもお金があっても心と心が憎しみ合い、蔑みあっていたら決して幸福とはいえぬと思う。貧しくともいい、狭くともいい、尊敬しあう暖かな心で満たされていれば幸せと思う。そして待たれている人生を送り続けたい。家庭からも、職場からも。ささやかな、そして大きな願いである。

大分前であるが『ゲルの相転移』の研究で仁科記念賞を受けた田中豊一さんの話を読んだことがあった。「いいデータが出なくて研究が行き詰まったとき、かえってわくわくするんです。なぜって、常識で割り切れない、興味ある現象にぶつかっている可能性が大きい

いから」という言葉があった。人生迷うとき、特に苦しみに陥った時、壁にぶち当たって落ち込むか、それをバネにして良い方向に変えていくか、勇気と知恵を養って人生を強く歩んでゆきたい。

私の過去の人生も大きな変化と、色々不幸な目にもあってきたが、生かされた人生であった。神に守られ、人々に守られた人生であったと、つくづく思い感謝している。地球規模で考えるとまだまだ不幸な人々が大勢いる。私の残された人生を少しでもお役に立てられたら、と思うこの頃である。まさに『人生色々』である。

仕事

日産に入社して私は主として設備や治工具設計の仕事をさせてもらっていた。昭和四十年の暮れ頃よりロボットによる自動化ラインの設計をしていた。ロボットは吉原特製のもので丸物特有なラインづくりが多かった。標準化が進み後では殆ど図面を書かないでもライン作りができるまでになった。

当時の吉原工場のロボットについて、伊藤誠一著『産業用ロボット』という本に次のように紹介されていた。『日産自動車吉原工場の工作機械へのローダー・アンローダー用のロボットの自社開発の例がある。一時は恐らく月産百台以上のビルディングブロック化された標準設計による工作機械用ロボットが、吉原工場の生産技術部門で作られていた。当時（昭和四十八年頃）僅か一ロット五台とか、せいぜい十台足らずの生産しかしていなかった工業会加盟のロボットメーカーの、顔色をなくしてしまったようなニュースであった。吉原工場の工務部次長であった吉村志郎氏から紹介されたこの事実は、それが尤も簡単な固定シーケンス型のロボットであったとしても、そのニーズを分析し部品を標準化し、数少ない種類の部品を組み合わせることによって、それぞれ異なった用途へのアプリケーションをおこなっている事実は、多くの産業用ロボットメーカーに大きな衝撃を与えたものであった。この時点での使用台数は、確か一千五百台、当時の日本のロボットメーカーと呼ばれる企業全体の一年間の生産量以上のものを、すでにユーザ自身が開発しているという事実であった』と記していた。

昭和五十年三月に『ロボットハンド組み込み歯車生産加工システム』で大河内記念生産賞を吉原工場が受けた。そのとき工場長だった久米工場長（現日産社長）から工場長室に一人呼ばれて、工場にきた賞状と楯の写真をもらいねぎらいの言葉を戴いて感激したこと

を覚えていた。

その他、技術的に面白かったものは、オイルパンの下に引くコルク材のパッキンをロボットで取らせるのに、エアーを吸うのではなく吹き付けて負圧にして、（ベルヌーイの定理を利用）持ち運びに成功したことである。見学者が手をかざしてエアーが吹いているので驚いていた。

ロボット工業会の委員に委嘱され、ロボットの安全基準の原案作りに参画したが、そのころロボットによる死亡事故も二、三あり、フルセーフの考えかたをどこまで取り入れられるかが問題であった。勉強になった委員会であった。またロボット工業会主催のロボットによる自動化についての講演会で、吉原工場の自動化について二、三回講演を引き受けたが、下手な私の話を熱心に聞いてくれていた。

そのほか一回転の中でバリアブルに歯数に変化するバリアブルピニオン歯切り装置、71Bミッシヨンの自動組み立てラインの設計、クランクライン熱処理のロボット化など印象に残るものである。また特許で心に残ったのは、某メーカーの依頼した特許を潰すために、「公知の事実である」と特許の裁判で証人に出廷したことである。普通の犯罪裁判のように、裁判官、検事、弁護士、傍聴席、証言台、等に相当する役の人々が形式も同じにあり、その前で証言台に立ち、真実のみ語ると証言署名し、検事、弁護士、裁判官の質問

に答えるのである。検事に相当する相手側の弁護士のパテンに乗せられ、失敗した証言もしてしまったが、いい経験であった。あとで聞いたのであるが、裁判は私達の方が勝った。

特許では、日産にいたる間に二十五件位出願していた。雑誌「機械の研究」に私の出願した、特公昭五九一七五三四『歯面の追加工装置』として紹介されたりした。三百六十円でできる改善特許の出願もあった。

その外ではJIS（日本工業規格）の歯切り工具委員になったことであった。なってみて解ったことであるが、委員は中立の学者とメーカーとユーザーの委員から成っており、委員長は互選であるが、中立の学者の方が成るのが通常であり、規格原案はメーカーが作るものであった。我々ユーザーは、ともすれば作り勝手の優先しがちの原案に、ユーザーの立場で修正意見をいう。我々とメーカーとは喧嘩相手であり中立の先生方が中を取り持つて決まるのである。先生方は良く知らない方もいたが私には面白い経験であった。辞令は中曽根商工大臣よりでていた。

吉原工場での最後の仕事は、ステアリングピニオンの組み立て機械の設計であった。製作完了時には吉原工場を定年退職していた。日産入社以来三十九年の歳月がたっていた。

第二の仕事

五十九年五月で定年を迎える春の頃、三枝吉原工場長より呼ばれて、定年後後藤製作所へ勤めてもらえないかと話があった。後藤製作の前の社長が求めておられるとのことだった。後藤製作は二、三回以前に訪問したことがあり、その時は荻野課長のお父さんが日産より出向されていて、歓迎されたことを覚えている。家からも通える距離なので、もう少しお勤めしようかとお受けした。

前に日産にいらして、自動化などを一緒にした『畑さん』が重役でおられ、私は技術部長とのこと、西も東も解らないのにいきなり部長で、原低計画やら、新規部品のたち上げやら、畑さんが助けてくれているとはいえ責任が重かった。それに後藤出身の人が五十五歳で定年となるのに、日産から来たというので六十過ぎの者がそのような役にいるのは心苦しかった。また日産と違い自動化も部品作りの工程が短く、それに一人当たり四百万円の設備費ではなかなか進まなかった。吉原の経験を生かしてホブ盤を富士岡倉庫から引っ張り出しサブギヤーやセンサーローターの部品を取り入れられたのは幸いだった。

約二年位して顧問の役にしてもらい気持ちの上でも大変楽になった。そして開発の仕事

をやることになったが、最初に始めたのがコントロールリンクの開発である。耐久テストやら仕様変更やら初めての部品開発はなかなか大変だったが受注に漕ぎ着けることができた。開発第一発の部品で受注に成功するとは、運が良かったと思う。後藤の主力製品になってくれたら、辞めても遊びに来られると思っている。

もう勤務して六年位になるが、なかなか気持ち良く働ける所である。四、五百人のこぢんまりした所が良いのかも知れない。人の顔も何となく覚えられるし、五年もいると気心も大体解ってくるから冗談も言えるようになり、楽しく働けるのだと思う。もう六年間も働かせてもらったのでここで退職し、年とった母が動ける間に親孝行のまね事もしたいし、ともに苦労した愛子にも樂をさせたいとの思いも大きいが、楽しくまた親しくしてくれる人達の多い第二の職場から離れるのもまた辛いことである。家族が丈夫で元気に働けることは本当に幸せなことと思っている。

この恵まれた第二の仕事場で私の持てる能力を生かして、楽しくして戴いた人達に少しでもお役に立てる仕事をやっていきたい。私の捧げる思い出の花として。

我が心への呼び掛け

私が自らの弱い心に呼び掛けるものとして、日ごろ思っているものは次のようなものである。私が中学生の頃、足の病気で家にいた時読んだ本の中に聖徳太子の十七条の憲法の第十条に和の精神を歌ったものがあった。

人皆心あり心おのおの生ずる所あり…… 我の是とするところ即ち彼は否とし

……相共に賢とし愚とせば輪の端なきがごとし。我、必ずしも聖にあらず、

彼必ずしも愚者にあらず。ただこれ凡夫のみ。

いづくんぞ良くその理を定めん……

というようなものであった。最近では和の精神より、戦う精神の方が大事といわれるが、この精神は己を高ぶらず、相手を蔑まず平等の立場で物事に対処することを言っているもの

と思つてゐる。私の戒めの第一であつた。

私は以前から、他人の欠点は見易く、長所は見にくいものと思つてゐる。何かの本で読んだと記憶しているが、他人の欠点より、長所を先ず見る者となれという意味である。そこには己の奢りはなく、へりくだりの精神があるのだと思う。人と人との交わりに於いても大事な教訓として、私の心に強く刻み付けた第二の戒めである。

人の一生には、自分ではどうしようもない運命的なものがあるように思う。例えば戦争のなかに青春があつたこと、病氣だつたこと等は、私の運命と思つてゐる。その中でそれらを呪うのではなく、いかにその時、対処したかが最も大事なことであつたように思う。愚痴などは言わずに、『今日一日に私の最善を尽くす』時に、悔いの残らぬ人生を送れるのだと己に言い聞かせてゐる。

仕事は自分で創造していくことが必要だと思つてゐる。もちろん言いつけられた仕事があり、それをこなすことは大切である。だが、その仕事の中に、自分というものを少しでも入れてゆきたい。言い換えるとその仕事の中に少しでも向上したものを、入れていくのが自分を生かすものであると言ひ聞かせてゐる。知識も知恵も足りないが、それが、私の進む道のように思つてゐる。

人間は考える葦だとよく言われるが、私のような凡人は特に考える必要があると思つて

いる。今日やった仕事を家に帰って考えるともっと良い方法が良く出てくる。「家に仕事を持ち帰るな」というが、私は、頭の切り替えがそう早くできない質であるらしい。朝早く考えると割に良い考えが出るが多い。私の宿命だと思っている。

使い捨ては美德だという人がいるが、納得いかぬことである。ノートもなく、鉛筆も買えぬ子供達が、東南アジアにはまだまだいる現実を見なくてはならぬと思っている。あの子供達に私としてできることはないのかと、己に問い掛ける日々でありたい。

私は社交性がない人間と自分でも思っている。戦時中に育ったからかも知れない。人に良い印象を与えることは大切なこととは思っている。大分前のことだがタバコを飲まぬことは、変人に思われたことがあった。みんな吸っているのに吸わぬのは付き合いが悪いのかと思ったこともあった。でも何となくタバコで自分をごまかすのが厭だった。最近吸わぬ人が持てはやされるようになって助かっている。これと付き合いとは、関係ないのかも知れぬが。私にできる姿で改善していくしかなさそうだ。

自分の心の弱さをしっかりと把握していなければならぬと思っている。ともすれば怒ってしまいそうになる心、弱くてくじけそうになる心、弱い自分を見いだすのである。幸い日曜礼拝で救われているように思う。弱い自分をしっかりと見つめていこう。

自分はあるのままの姿で生きていこう。背伸びは要らない。褒めてもらわなくて良い。

背伸びをしたらきつと心も体も折れてしまうだろう。褒められると自分を忘れて有頂天になる己であるかもしれないから。

もっともって生きていきたい。もっともって人との交わりを深めていきたい。もっと己の感性を磨きあげていきたい。悲しい時に共に泣きたい。喜びの時に共に大声をあげて喜びたい。幸せも悲しみも多くの人と共にあるのだと、自分に言い聞かせていきたい。かたくなな心の持ち主だと知っているから。

家庭 (二)

3人の子供たちは大きな病気もせず成長していった。長男が五歳位の時にその頃まだ少なかったテープレコーダーをボーナスから奮発して買い求めた。大枚二万円位だったと記憶している。東京大阪間千二百円位の汽車賃の時だった。カセット方式などない時代でリール式である。早速我が家全員のメッセージを録音したが、長男ははきはきと話しかできていたが、次男は赤ちゃん言葉が残り、長女は泣き声だった。声は子供の頭と心の成長

を記録するものとして貴重なその時々を残してくれていた。

長男が小学校一年生の時学校で水泳大会があった。二十五メートル位泳いだと思う。クロールであったが、バタフライみたいにおしりを上げて泳ぐので、見ているのが恥ずかしい位であった。でも翌年の大会には奇麗なクロールで勝っていた。回りの見る目など気にしない性質が成長させたのと思う。アコーデオンを鳴らしながら小学校まで友達を引き連れて登校などしていた。

次男は負けん気が強く、やられたら必ずやり返す性格だった。「下校の途中で子どもが喧嘩をしているので、止めたらお宅の子供さんだった」と知人から言われたこともあった。長女はやはり女らしく優しい性格であった。生まれたばかりの捨て犬を五匹拾ってきて、ミルクで育て始めた。とても五匹は飼えぬので親類やら知人に頼み込んで、四匹のもらい先が決まるまで大変であった。一匹残った雌犬は、結局私が主に散歩役をおわされた。

昭和四十五年大阪で開催された日本万国博覧会に長男と次男を連れて見学に行った。米国のアポロ計画で持ち帰った『月の石』など人混みの中で見ることができたが、夜は京都の親類で泊めてもらった。お風呂は近所の銭湯に二人の子供を連れていった。生まれて初めての銭湯である。体を洗った時、子供たちが立ったままお湯を体にかけて近所の人にしぶきが掛かって叱られてしまった。子供たちへの躾の足りなさを身に染みて感じた。月の

石を見た感激よりも私の胸を射た出来事であった。中学生の頃は長男は砲丸投げ、次男は短距離の選手として励んでいた。休みの度に陸上競技場などに私と愛子は運転手兼応援団として引っぱり回された。その甲斐あってか二人共それぞれ県大会に優勝することができた。

長男の高校入試の時期が来た。そのころ長男は医者になるのが希望であった。清水東の理数科を受験するかどうか、田舎の中学では入ってもついてゆけるかどうか、とても心配であった。近所に元清水東の先生がおられるのを聞き長男と伺ったり、また清水東の理数科にいる学生の家を尋ねたりして様子を伺った。医者になるには理数科に入らないと難しいとのこと、思いきって清水東の理数科に入学した。次男も長男の後を追って同じ学校に入学した。

高校に入学すると同時に陸上はびたっと止めていた。二年から大学入試の勉強が始まった。長男は朝型で学校から帰るとご飯を食べてすぐ寝てしまった。夜中の二時頃起きて勉強である。愛子は夜食の準備に追われていた。またラジオ日本の受験番組を欠かさず受けていたが、期末試験の時などそれができぬので私が夜中に起きてテープ録音の役をせざるを得なかった。その時は親子共々の受験戦争であった。

長男は東大に次男は浜松医大に長女は常葉短大に入ることができたが、一時は三人の大

學生を抱えた。愛子は近くの売店でパートとして働いていた。ボーナスも全部学費に変わっていった。

東大の入学式に私も付いていった。安田講堂の前に立ったとき私の夢をかなえてくれた嬉しさが込み上げてきた。次男の時は卒業式に参列した。卒業生が外で記念写真を撮っていた。私が二階から見ていると、次男が下で卒業証書を振っていた。長女の卒業式には愛子が参列した。音楽部を出たので長男次男のいなくなった我が家に、慰めの響きを響かせてくれた。

長男は大学院を出て結婚し東京に新居を構えた。子供が二人できた。私と愛子は『おじいちゃん』と『おばあちゃん』となってしまった。片言で良く電話を掛けてくる。私もまた負けずに電話を良く掛ける。電話口に出てくるのは、孫がほとんどである。孫は子供以上にかわいいのかも知れない。私のように苦勞の多かった人生を歩ませたくはない。平和な日本、平和な世界を改めて祈る心の毎日である。

『我が心の豎琴』、書き始めて約一ヶ月―勤務のかたわら、自分の人生を通して心に感じたことを書いたつもりでいるが、言葉足らず筆足らずの所も多く、私の思いの一端になってしまっている。これが私の表現力の限界だと思っている。豎琴の響きは小さかった。人に聞かせる響きではなかったかも知れない。でも私のささやかな人生の響きを響かせた

かった。この世に生かしてもらったせめてものお礼を託したかった。

随 想

全体と個人と

先日から三回に渡って『ミズリー号への道』と題して加瀬俊一さんの人生読本が朝のラジオで放送されていた。朝五時四十五分からの放送である。第一回目の放送は残念ながら聞き漏らしたが、二回目と三回目は聞くことができた。大東亜戦争の終戦にまつわる秘話である。ドイツが降伏する少し前に米国のルーズベルト大統領が亡くなった電報が外務省に入電した。戦っている敵国の大統領の死であるから一面では喜んで良いのであるが、やはり個人の死は悼むべきであるとの加瀬氏の意見が入られ哀悼の弔電を送ったとのことである。一方ドイツは敵国の大統領の死を喜んで発表したそうである。それが米国で大きく取り上げられ、さすが敵に塩を送った『葉隠（はがくれ）の国』であるとニューヨークタイムスに大きく報道されたとのことである。国内にいた我々の知らないニュースである。国と国との大きな戦いの中であっても、国を代表する者の死を悼む国としての節度があったこと、人の死はどんな環境の中にあっても哀悼の心を持ち個人の冥福を祈るべきことを教えられる思いであった。

また第三話は、時の重光外務大臣に随行したミズリー号上での降伏調印式のことであった。加瀬氏も武士の家柄だったので、降伏する事への屈辱感に耐え難い思いであったのだ。そうだ。式に行く途中で誰かが爆弾でも投げてくれて屍をさらす方がずっと良いと思っていた。だが、重光大臣の「新生日本の夜明けの式に行くのだ」との言葉に励まされて付いて行ったとのことである。

式の始まる前に、予定にはなかったことであるが、マッカーサー元帥が小さなメモを取り出し演説を始めたのでびっくりして全神経を緊張して聴き入った。マッカーサーは、

「我々は日本を屈服させに来たのではなく、正義と友愛と民主主義をもたらすために来たのだ」との要旨の演説であり、それを聞いた途端、日本は救われた、という思いで一杯になり涙が止めどなく流れたとのことである。式に行く前の徹夜に継ぐ徹夜で疲れ果てた体に、無条件降伏とはいえ日本の残存が許され、喜びが沸き上がって来た瞬間であったようである。

マッカーサーは調印が済むとどこかにいってしまった。連合国の各国の調印が終わると、正副の調印文書の交換がなされ、それを加瀬さんは自分の出番と丹念にゆっくりとチェックしていった。そして、国と署名者の欄がずれているのを発見しそれを相手の係官に指摘すると、「降伏に来た国が何事ぞ」と言わんばかりに訂正を拒否されてしまった。

「このような間違つた物は受け取れない」とのやり取りが行われ、「どうしても訂正を拒むなら受け取って帰るが、後世に『マッカーサーは間違つた物を受け取らせた』となつても良いのか」と詰め寄ると、係官は真つ青になり訂正に応じたとのことである。間違つた交換公文を受け取って来たら代表団は腹切りものであったとのことである。新生日本の最初の堂々たる外交交渉であつた。

以上のことを重光外務大臣が顔一面涙ながらに天皇陛下に奏上したのであるが陛下も白い手袋でしきりと目頭をこすりながらお聞きになつていたとのことである。我々も同じ時代に生を受け、個人の幸福等考える余裕すらないことに、少しの疑問も持たなかつた時代であつた。国のため、全体のために生きる時であつた。並みいる勝者の前で、丸腰のまま敗戦国の代表としてそこに立ち、堂々と過ちを発見し指摘できる勇氣、それは己を捨てた生き方だつたからかも知れない。

全体のために個人を犠牲にする時代は終わった。だが、個人だけでは生きられないし、幸せも得られぬことと思う。他との助けあい、他をいたわる心があつて初めて心と心が結ばれ幸福を得られることと思う。

個人だけの幸せを思えば、屈辱の調印式には出席しなかつたであろう。敗戦後の日本は、全体主義から個人主義への行き過ぎた考え方が、一時横行した時でもあつた。精神的虚無

の時代といつて良いのかも知れないが、人間の心の持ちかたは、その行動を極端に変えるものだった。個人の幸せを基調とした全体との調和、それに勇氣を持って対処すること、これこそ現代に生きる者としての生き方なのであらう。

またそれは人と人との交わりばかりでなく、この地球に生きる総ての生物や、環境を含めた問題であり、人間に課せられた大きな責任と思う。人のエゴ、国のエゴを乗り越えて進むべき時となっている。

湾岸戦争等を見ると、まだまだ人のエゴ、国のエゴがいかに多くの人を苦しめ、地球を傷めているか人の愚かさで無知を感じざるを得ない。

己を始め、地球人として反省する所、大である。

(一九九一年八月十日 記)

『出合い』

『であい』―漢字で書くと『出合い』『出合い』また『出逢い』という字を使っている。私は恥ずかしいことながら浅学にしてその使い分けを良く知らない。

でも『出合い』というものに非常に引き付けられるものを感じる。年を取ったせいかも知れない。良く言えば心に余裕ができたのかも知れない。がむしゃらに働いてきた時には感じられなかったことのようにも思える。

美しい絵を見て感動を覚え、しばし見つめている時、何か心が澄んだように思え、その絵と会ったことを喜ぶ。人と物との出合いである。

よく会社の帰りなどに赤提灯（ちようちん）によって一杯飲んで行くなどというのも大半は、気持ち良くしてくれる酒と出合いまたそこで人と出合うのを樂しみに行くのではないかと思う。最近流行っているカラオケ等も一人で歌うのではなく歌を通じ人と出合う喜びがあるからであろう。

そこには飾らぬ人生があり、真実の声が人の共感を呼ぶものなのだろう。道端でも、公

園でも、あるいは建物の中に於いても人の善意に会った時に、私は美しい出会いを感じる
ことができるのは幸せだと思っている。

『出会い』―それは人の心に何か感銘を与えた時に成立するものなのだろう。人に会い、
また物を見ても何にも感じられぬ時、あるいは感じさせることができない時、それは接し
たのであって『出会い』とは言えぬものであろう。

生きがいとは、人と人とが心を通じ会えることであり、人に喜びを与えられる時、人か
ら喜びをもらうとき、あるいは悲しみを共に泣き、慰め合える時に感じるものなのではな
いかと思う。そこには出会いから始まった人と人との織り成す心のつながりがあって初め
て成り立つものと思う。

『出会い』とは不思議な縁とも言える。運命の為す所かも知れない。我々の意志で為す
ことではないかも知れない。

地球が誕生し生物が発生しそして人が現れて何億年の時がたって、またこれからも何億
年の月日が流れるであろうこの地球上で、今の時に共に生を受け出合うということは、本
当に奇跡と言うか偶然と言うしかないと思う。神が与えて下さったこの出会いをやはり大
事にしなくてはならぬと思うのである。

出合うという大きな流れの中で小さなことで怒り、喚き、悲しみ、嘆く、心の小ささを

思う。誰も停めることのできないこの時の流れのベルトに共に乗り共に語らい、働き、遊び、心の中に生きる人々―生きがいはその中に生まれて来るものである。人を思う心も人を愛する気持ちも出会いの中に生ずるものと思う。

年を取って来ると己の弱さを感じるためか、出会いの喜びが、人の親切が強く心を打つように成ったと思う。いや己の感性が強まったと心秘かに慰めている。

先日九十四歳を越えた母を伴って、紅葉を求めながら御殿場の温泉に行ってきた。腰も曲がらず比較的元気な母が一人でお風呂に入っていると、見ず知らずの人が背中を流してくれたり肩を揉んでくれたりして大変喜んでた。私よりずっと先のベルトに乗っている母は私以上に出会いの喜び、人の親切が感じられるのかも知れない。旅を喜ぶ人は自然から受ける感動を、そして人と人との出会いを求めて歩いて行くのであろう。喜びをその中に求めて。

日常茶飯事に起きる小さな出会いから、一生を左右する大きな出会いまでが、私達の回りには、見えない渦として取り巻いているようにさえ感ずる。研ぎ澄ました心で、もっと豊かな感性で、日常を見据えて行きたい。そして残された年月、私もその中に人生の幸せを求めて行きたい。

人から受ける善意の出会いを、貧しい心の私にも豊かに受け持ちたい。暖かな心で接せ

られる私の姿として、私の一生の置き土産として。

(一九九一年十二月二十日 記)

路面電車

私が生まれ、そして東京を離れた昭和二〇年の終戦の時まで住んでいた高樹町のそばを、路面電車が走っていた。

渋谷から青山通りにある青山学院の前を通り高樹町を経て乃木神社がそばにある六本木から溜池を通り新橋までの区間を走っていた。

その間、道は全部舗装されていた。レールは他の交通の邪魔にならぬよう、路面の中に埋没され、複線のレールが敷かれていた。朝の五時頃より一番電車が走り、運転手と車掌の二人で各停留所で乗り降りする乗客をさばいていた。その頃その区間の乗車賃はたしか七錢であったが、乗り降りの時に運転手さんも車掌さんもお金を受け取ると、体の前にぶら下げた革の大きな口を開けるカバンから券を取り出し、東京の電車区間や停留所が線で描かれている細長い乗車券に、乗った所と降りる所の停留所に挟みで穴を開けて渡してくれていた。

丸く穴を空けるあの懐かしい挟みは、路面電車は無くなったが新幹線の車内販売の道具

として、時速二百二十キロメートルのスピードで走っている。

電車の構造は手で開閉するドアが電車の前後にあり、停留所に着くと車掌さんがドアを開けて乗客を乗せていた。乗り終わると後ろの車掌さんは垂れている紐を挽いて合図するのであるが、その構造は車掌さんのいる後ろの運転席から前の運転席まで直径五ミリ位の紐を通じてあり、ところどころに丸い輪形の針金のガイドの中を通して紐が垂れるのを防いでいた。紐の先は鐘をたたく槌につながっており、後ろで紐を挽くと前の運転手さんの所の鐘をたたく仕組みになっていた。停電でも困らない頗るシンプルな構造である。

チンチンと二回たたくと発車オーライの合図で電車は走り出していった。路面電車を通称チンチン電車というのもこの鐘の音から出たあだ名と思うが、懐かしい名称である。動力源として、道の両脇の電信柱から吊り提げられた架線より電気を取り入れる構造は、今の電車のようなパンタグラフによるのとは違い、電車の屋根の中央付近を支点としてバネで上に上げられる棒のようなポールの先に、架線のちょうど入る溝を持つプリー型の回転体を取り付けられており、そのそばに紐が付けられて運転席の外に縛られていた。

最初に電車が動き出す時は、車掌さんが後ろの窓から首を出し電車に結ばれた紐の一端を緩めると、ポールは支点を中心として円弧を描くように片端がスプリングにより揚がり、先に付けられた回転体の滑車の溝を架線に入れるのである。うまく入らないと架線とポー

ルの間で青い火花が飛んでいた。直線と右左に曲がる交差点になると架線から滑車が外れるので、それをうまく進行方向の架線に入れるのが車掌さんの腕の見せ所であった。首を出して操っている姿は、懐かしい思い出の風景である。

それからもう一つ面白い仕掛けがあった。それは電車の下の子車輪の前にレールから十センチ位浮かして吊ってある網である。その網は家庭で良く吸い物の出し汁をとる網を大きくしたような物で、幅は電車の幅に近い物で長さは一メートル位である。それが前後の車輪の前に付いていた。目的ははっきり聞いたことはないが、人や犬や猫が挽かれようとするときに、その網が掬い挙げてくれる物と誰からともなく聞いていた。非常にほほえましい安全対策である。

またレールの上の自動車等の邪魔ものを退かせるのに、運転手の足元にある突起を踏むと、電車の下の子車輪をたたく仕掛けになっており、チンチンチンチンと足早にたたいて相手避けさせる合図をしていた。これも電氣を使わぬ安全対策である。

普通は人に乗せて走る電車が殆ど走っていたが、ごくたまに電車の真ん中が屋根のない無蓋車となっている貨物電車がかった。それが何か御祝ひ事があると（たしか平成天皇の御生まれになった時）花電車に変身したりしていた。無蓋車の所に人形やら花を一杯に飾り、夜は様々な色の豆電球を付けて東京市内を走る電車を、皆で見に行ったりした。路面

電車と大衆との懐かしい交わりの時であった。

私が小さな時のことであるが、電車のレールの上に釘を並べて置くと、その上を電車が通り釘はペチャンコに潰れてナイフのようになり、また手で持てない位熱くなっていた。そのナイフを友達と作るのが面白くて、よくいたずらしたものだ。ある時運転手さんに見付かり電車の中から大声で叱られたこともあった。それが元で脱線でもしたら大変なことになる訳である。幼き日のいたずらである。何も知らぬ強みなのかも知れない。知りすぎて大胆さがなくなった現在なのかも知れない。

運転席の左手にあったトランスのハンドルを回すと速くなる電車、シュツ、シュツと音をたてて懸かるブレーキ、小さい時はその運転席の見える所に立って見るのが楽しみだったが、なぜ動くのか不思議でならなかった。何時から路面電車がなくなったかは、終戦前に東京を離れた私には良く解らないが、東京オリンピックの前頃ではないかと思っている。魚河岸から仕入れた魚を持って乗っている魚屋さん、大きな風呂敷を背負って売りにゆくおばあさん、髭を生やした偉そうな紳士、軍人、いろんな社会の層を乗せて揺れながら走っていた路面電車―車の少ない時代の大衆の足であり、また貴重な交わりの場であったのかも知れない。

私の脳裏に焼き付いている路面電車―時の流れを感じると共にまた鮮明に蘇ってくるのである。幼き日の懐かしき友、路面電車として。

（一九九一年十一月二十七日 記）

東大病院にて

「痛いよー、痛いよー」の声で寝つかれぬ夜が更ける。私が腎臓結核で腎臓を摘出した後が思わしくなく、切開部を再手術するために東大病院に入院した最初の夜である。

古い病室はおせじにも奇麗とはいえなかった。隣のベットには六〇歳位のおじいさんが入院していた。新参ものの礼儀として私に付き添ってきてくれた母が挨拶しても、ろくに返事も返って来ない。うつむいて何かを考えているおじいさん。広い病室には七、八人の患者が入院していた。そのおじいさんには、付き添いの家政婦が付いていたが、余り用がないのかよく遊びに行っていた。傷の手当等隣にいれば厭でも見えてしまうのであるがそのおじいさんは、膀胱の摘出手術をして横腹に人口膀胱の袋をぶら下げているのであった。尿管に接続されているゴムのパイプがまだ癒えぬ傷口にこすれるのか、動く痛いようであつた。

私には、翌朝空き腹の時に看護婦さんが、一リットル近くの水を大きなコップになみなみと持ってきた。静脈に注射した後、その水を全部飲み干すのである。胃には何も入って

ないとはいえ、一リットルの水を一気に飲むのは、いささかしんどかった。そして確か一五分、三十分、一時間、二時間と尿を手瓶に取るのである。そんなに出るのかと思ったが案ずるより産むは易しである。注射された薬がどれだけ良く排出されるか、遣された右の腎臓の機能検査であったようだ。

内科的検査等をしていよいよ再手術の日がきた。お決まりの移動ベットに乗せられて手術室に入り、手術ベットに寝かされ白い布で顔の上を覆われて回りが見えなくなる。前回と同じく横に寝かされての手術である。手術をしてくれるのは、助教授で、担当の医者が脈をとってくれていた。他に二、三人の医者がいたようだが良く解らない。

麻酔のせいで少しも痛くなく、自分の体を切られていながら何をされているのかさっぱり解らない。医者が時々小さな声でささやくのが聞こえる位である。ストレプトマイシンを傷の奥に入れて傷口は縫わずに自然にふさがるのを待つようである。担当の医者が脈を取りながら時々白い布をちょっと開けて「大丈夫？」と聞いてくれていた。傷が開きっぱなしなので腹巻きのように包帯をまかれて、また移動ベットの上の住人となって手術室を出ていった。

一時間余りの手術時間であったと思うが、前回の時と異なってベットが横の体形に合わせてあるのか肩の痛みなどなく、やはり専門専門の道具があるものだと感心した。出る時

ちらっと黒板を見ると手術の時の出血量がちゃんと書いてあった。その時私はどうやって出血量を計ったのか不思議でならなかった。後で考えたのであるが、多分血のついたガーゼの目方を計り、奇麗なガーゼとの目方の差で計っているのではないかと思っている。それにしても手早い処置であると思った。

病室に帰り翌日からガーゼ交換である。深く長く空いた傷口にガーゼがすっぽり入り隣のおじいさんの付き添い婦の人が気持ち悪くて見ていられないといっていた。確かにガーゼ交換は痛かった。

さて病院も何日かいると、炊事場等での、付き添いの人の井戸端会議で、病室の患者の一人一人の病気の状態などが多少耳に入ってくる。殆どの人がガンのようであった。隣のおじいさんも半年前の胃ガンの手術の後の転移が原因で膀胱を摘出したようだった。私が入院して一週間位で息子が迎えにきて退院していったが、私が退院する前に家で亡くなったと伝え聞いた。多分あのおじいさんは自分の寿命を知っていたのだろう。広い病室には学校の先生だったという七十歳位のおじいさんがいた。時々見舞いにくる奥さんも先生をしているらしかった。そのおじいさんも衰弱がだんだんと激しくなっていくのが、はた目にも解る位であった。ある時その奥さんを、人目も構わず抱き締めて泣いていた。

生への愛着か、別れの悲しみか、そこには純粹な二人だけの思いが、他人など意識しな

い強さとなって現れていたことと思う。他人に見える所で恥ずかしいとか、何と言われるか解らないとか、他を意識した打算的な考えの存在、それは本当の意味の純粹な愛とは言えないのだと思った。死を前にした、美しいと言うか、尊嚴な気持ちを私に与えていた。誰もが迎える死について考えさせられる一時であった。

「痛いよー、痛いよー」と言っていた子供も一週間ほどで亡くなった。腎臓が悪く尿毒症を起こして頭が痛かったようである。遺された病室には千羽鶴が一杯ぶら下がっていた。山梨の方からお母さんがずっと付き添いでついておられたようだった。

生と死、それは自分ではコントロールできないもので占められている。医学が幾ら発達したとしても、死は避けられぬものである。この地球上の総ての生きとし生けるものが。

私は幸いにして傷も順調に癒えて来た。最後の方はずっと付き添ってくれた母と、病室を抜け出して上野の忍ばずの池のほとりで行われていた盆踊りを見に行ったりすることができた。久し振りの東京生活を共に楽しんでいた。

東大病院で多くの死を見つめる人と接して、早や四十年近くの年月が過ぎ、改めてその時を振り返り、死とは何か、生きるとは何か、生きている貴さとは何かと、自身に問いかける今日この頃である。

生かされた私は、今日を大事に生きてゆきたい。

(一九九一年十二月八日 記)

故郷

梅雨明けを宣言されて日も余り立たぬ七月一九日。前夜泊まった長男の家を後にして、首都高速の渋谷インターより降り、私の生まれた地、東京都青山七丁目、旧町名高樹町の一角に母と立ち寄って見た。この地を去ってから私は四〇五回目の訪問である。遊び回った広場は富士フィルムの高層ビルで跡形もなく変わり、私の住んでいた地は、高樹スタジアムとか言う建物で埋められていた。以前よく遊んだ家の前の道路が狭く感ぜられるのは車で通ったせいだろうか。

ゆっくりと車を走らせながら一軒一軒の表札を目を皿のようにして見て歩いても五十年前の知っている名前は見当たらず、僅かに本屋の隣に住んでいた肉屋の根岸さんが建てたであろうビルが目についた。左足の関節結核で三年余りご厄介になった赤十字病院の前を通ったがこの付近は昔の面影を残していた。

高樹スタジアムの駐車場に少し車を止めさせてもらい、あのへんに井戸があったなあとか、よく昇った杉の木が三本あったのはどのへんかなあ？等と帰らざる五〇年近くの歳月

を経た故郷の懐かしさをしばし味わって来た。

再び帰ることはないであろう故郷の地、よく遊んだ小学校の友達―私の心だけに残された懐かしき故郷、友達である。戦争という大きな爪痕がいかに多くの人達の運命を変えたか。私などはまだ良い方かも知れない。

そして私にはもう一つの大きな故郷がある。それは母である。九四才になっても、ひ孫を抱いて喜ぶ母である。私の小さいときからの思い出は私の心そのものである。お正月に兄弟やら孫、ひ孫までそろって集まれるのも、母という故郷が存在するからと思う。啄木の歌に

『戯れに 母を背負いてその余り

軽きに泣きて 三步まず』

と書かれた心境がひしひしと胸に迫って来る。

沖繩の黒島にいる次男の嫁が時々電話をして来る時に、まだ一度しかあったことがないのに母の安否を長距離電話で必ず聞いてくれる。私にとっての宝ものを共に大事にしてくれる心が嬉しくてならない。

心の故郷の母、もっともっと大事にして長く長く生きてもらいたいものである。

『身体髪膚（はっぷ）、これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり

身を立て道を行い、名を後世に残し、もって父母を現すは孝の終わりなり』

と中国の教えにあったが、よく病氣をして親不孝をした者としては、これからが孝の始まりの正念場なのかも知れない。故郷を背負ってくれている母に對して！

（一九九二年八月三日 記）

道草

久し振りで分厚い汽車の時刻表を買った。五月三日に佐世保で結婚式を挙げる姪の祝いの宴に出席のためである。それとも一つ私には目的があった。

それは一つになる次男の子供、私には孫に当たる子に会うためである。子供が産まれた時、次男は沖繩に医者として勤務していたため、私はまだ会わぬ孫である。

さて舞鶴經由佐世保行きの私にとっては、久し振りの長旅を会社の昼休みに時間表を見ながら考えていると、「佐世保、遠いねえ、博多から二時間もある」と言いながら、課長も一緒になって時刻表の旅を楽しんでいた。

「気をつけて行ってらっしゃい」と五月の連休に入る前の励ましの言葉を心にしまいながら、早朝の新幹線の人となる。思ったより空いていて、悠々と自由席に座る。あいにく、どんよりと曇った空は雨を降らせたがっていた。京都着九時三十四分の、予定より少し早い電車に乗ってしまった。外に出るのも少し足りない時間だし、ホームの中をぶらぶらしながら土産店等を何となく見ている「ちょっと入って見たいなあ」と思わせる随分立派な

店が、せわしく動き回る旅客の懷を狙つて所せましと品物を並べている。京都発十一時の丹後一号は座席指定を取つてあるので急いで乗ることはないのであるが、まだ二、三名しかいない車両に自分の席をがちりと固めて座る。左窓ぎわの席である。隣の席に中年を過ぎた女の人が、重そうな荷物をもつて来た。荷物を編み棚の上に挙げるのを手伝つて上げると、親しうに話し掛けて来る。千葉市から西舞鶴への里帰りで、足の悪いお母さんを見舞い兼遊びに行く所とのこと。従つて地理に詳しく、昔はもっと嵯峨の川沿いに汽車が走つていて景色が良かったとのこと、それでも曲がりくねった嵯峨の山並みを流れる川が右に流れたり左に流れたりする変化をトンネルを出るたびに感じながらの汽車の旅は、私にとって捨てがたいものであった。お母さんが病弱だとのことなので、これから訪ねる子供が東舞鶴の医師をしていると言つと、一目見たときに私を医師か牧師ではないかと思つたと言つていた。そのように間違えられたのは初めての経験である。

急行列車は二時間程の道のりを経て、東舞鶴駅に着く。改札に待つてた次男の車は、中古とは言え私の車より大きく内装も整つていた。五、六分で医師住宅に住む次男の家に着く。病院のすぐ裏にあるお抱え医師住宅である。それでも三LDKの部屋は三人住まいにはもったいない感じすらする部屋である。

一才になる孫は、初対面の私には最初なじまなかったが、土産のお菓子を出すと現金に

もすぐ私にだかさって来た。良く大声を出して喚く元気な女の子である。自己主張が強い子なのかも知れない。五、六歩歩くと尻餅についてうまく転がる。転んだ痛みをしっかり覚えて、体験から生み出した賜物だろう。嫁の妹が手伝いに来てくれているが、子供一人を育てることは大変なことである。でも家庭が明るく笑いが絶えないのは、子供のいるためであらう。

六畳の部屋に一人で寝かせてもらう。まだ時間は早いのであるが、佐世保までの長旅を思つての嫁の配慮である。孫たちが『うちのおじいちゃん』とでも作文が書けるまで、いけないで元気でいたいものである。

幸い天気予報は明日から段々良い方向となると報じていた。旅の疲れが出たせい、私は羽根布団の中でぐっすりと寝かせてもらっていた。

訪ねきし

地に雲厚くたるれども

孫抱く我の心晴れたり。

翌日は、日本三景の一つである天の橋立に次男の車で行くことになった。私には初めて

の地である。一七八号線を舞鶴湾沿いに約一時間、ケーブルカー発着所に着く。ケーブルカー乗車約四分で着き、さらに階段を少し登ると『股のぞき』の場所に出る。平らな石が三セット用意されており、その上に乗り股下から逆さの天の橋立てを見るのである。あまり格好良いものではない。

でもせっかく来たのであるから、私も股を開いて橋立てを見るとまた別の感覚で松林が迫ってくる。団体の客が来て当たりに嬌声が響く。中年の女性客が多いせいかガイドの多少エッチな説明が良いのか、なかなか賑やかな場所である。でも天然にできた細長い橋として、自然のカラクリの微妙な点を感じさせられるものであった。帰りには西と東の両舞鶴に分けている五老岳公園に登ってみた。西舞鶴湾、東舞鶴湾一帯の湾の眺めはすばらしく、また東と西がこんな山によって隔てられており、同じ行政府の中の市として悩みも多いのではないかと感じた。

午後からは『岸壁の母』で有名な『引き揚げ記念公園』に行ってみた。一人で散歩を兼ねて歩いて行こうと思ったら「これから五kmもあってとても大変ですよ」とのこと。親切なおばさんの忠告に従って車で行くことにした。

出発が少し遅れて、資料館に着いたのが閉館一時間前ぐらいであった。維持費にするのであろうか特産品の食糧販売の店は仕舞いかけていたので、まず記念館に入り資料陳列を

見せてもらう。引き揚げ当時の証明書やら極寒の地での苛酷な労働の画など、また現物の服や食器類が並べられていた。『岸壁の母』のモデルであったおばあさんの写真、一人息子の写真など、六十六万人もの引き揚げを受け継いだこの町の悲喜こもごもが思い出させられる資料に満ちていた。それから公園内の少し小高い見晴らし台に行くと、当時の接岸に使っていた岸壁の一部がまだ残されており山の上から更に引き揚げ時の喜びと、帰らぬ息子を持つ人との心が忍ばれるものであった。

翌日は本番の結婚式に向かう旅路の日である。東舞鶴駅を七時四分発特急あさしお2号に乗る。途中で進行方向が変わる単線運転である。静岡県とまた違う樹木で覆われた感じの山々を後にして、京都八時五十三分着、定刻であった。急ぎに急いで九時一分発の新幹線に飛び乗る。大坂発の自由席を確保するためである。でもねらっていた車は一杯であった。次の大阪発を待ってホームに立っていたら臨時らしい博多行きが来て自由席に悠々と座ることができた。昨日の『岸壁の母』が守ってくれたのかも知れないと勝手なことを思っている、隣の席に豊橋の職員の人が広島同窓会に出席するために行くのだと乗って来た。

『旅は道づれ、世は情け』とばかり職員の給与の話から、業者の賄賂の話まで、飽きることなく広島に着いてしまった。博多で長崎線に乗り換え佐世保着は十六時三十五分であ

る。予約していたホテルに荷物を預け、駅の案内所に行ってみる。驚いたことに今夜の宿を探す人で一杯である。連休と、島に帰る予定の人が船が欠航で帰れず泊まるので、一杯となったようである。「『どんな小さな旅館でも一杯ではありません。どこかラブホテルでも探して下さい』と案内人が悲鳴を上げていた。

明日の結婚式の予定会場である、佐世保三浦カトリック教会に行ってみる。通りに面してじぐざぐに上がって行く階段を上り詰めると、そこに教会正面玄関があった。教会案内が書いてあるので一部戴いてみる。創立昭和六年の由緒ある教会で、戦時中は立派な教会の建物を黒く塗って空襲の目標にならないようにさせられたとのことである。佐世保港を見下ろして立つ立派な塔はさすが長崎一番を誇るだけある建物である。その夜は明日の結婚式の前夜祭とばかり、花嫁を交えて富士から出掛けた連中がほろ酔い気分で大いに気炎を上げていた。

結婚式当日は気になっていた天気も、青空の良い天気になり、正午からの結婚式までに時間があるので、昨日案内所で仕入れたパンフレットの藤山神社に出掛けることにした。九州随一フジの庭園、長崎県の万葉の観光地のパンフレットの文字が、私を引き付けた。佐世保駅から松浦鉄道に乗り、途中でバスに乗り換える案内である。電車を降りたらバスの停留所が見えない。近所のおばさんに聞いたら、私は藤山神社に行ったことがないから、

と要領を得ない。大きな通りまで出てみると、少し離れたところにバス停があった。今度はおじいさんに聞いてみると、この道は新道で停留所があってもバスは余り通らないので、五分位歩いた旧道に行った方が良いと親切に教えてくれ、旧道バス停留所で少し待つとバスが来た。やれやれとバスに座って藤山神社入り口なるバス停留所を今か今かと目と耳を研ぎ澄まして待っているが一向に出て来ずバスの終点に来てしまった。運転手さんに聞いてみると旧道には藤山神社前はなく、二、三停留所前で降りれば良かったように歩いて十分程度とのこと、胸を撫で下ろしながら引き返して教えられた通り曲がると、目的の神社があった。藤の花は今が盛りのように咲き、その匂いが当たり一面に匂っていた。ああ苦勞した甲斐があった！

あまり人もいないので、セルフタイマーで写真を取る。長居をして肝心の結婚式に間に合わない大変とばかり、バス停を見ると確かに一時間一本のバスである。急遽旧道に回ってみる。念のために通り掛かった若い人に聞いて確認して佐世保駅行きに乗り駅についた。

部屋で式服に着替え早速隣の教会の庭に行ってみる。まだ花婿も花嫁もない。写真屋さんが手持ち無沙汰で待っていた。教会の庭にはマリアの像があり、プロテスタントの教会とは些か趣を異にしている。

やがて三三五参列者らしき人が集まって来る。どの方がどなたなのか紹介されぬので、何となく手持ち無沙汰である。気さくな、話し易そうな人に名乗り出て挨拶をする。花婿が来て、やがてウエディングドレスに着飾った花嫁が姿を現す。健康的な喜びに満ちた一番美しい姿である。

ぼちぼち正午の予定の時間近くなり、教会内に入ってみる。ステンドグラスの色が美しく輝き、礼拝堂を見下ろしている。カトリックの教会らしい厳かさが漂った美しい教会である。

若い日本人の神父の司会のもとに式が始まった。聖書の朗読、賛美の奏楽の内に父親に手を引かれた花嫁が、正面入り口より光を背に受けながら入場して来た。花嫁は割に堂々とした歩であるが、父親は多少照れ臭いのか花嫁と反対方向に体を曲げぎみに歩いている。今日の日には父親にとって一世一代の晴れ姿なのかも知れない。誓いの言葉、指輪交換と型通りの式が、滞りなく無事終了した。

それにしても、神父さんの言葉も、美しいコーラスの歌声も全部日本語で行われ、私の知っていた二三十年前のカトリックの式と異なっており、プロテスタントと殆ど同じになっていたのは、多少意外であった。

ともかく神に誓った言葉を忘れずに、暖かい家庭を末永く築いてほしい。記念写真は教

会の庭で撮られたが、角隠しのうつむきかげんの姿と異なり、健康的な笑いが白いドレスの中に見え隠れしていた。

披露宴は隣のホテルで行われた。型通りの紹介やら挨拶があったが、花婿、花嫁の出席者に対するそれぞれの呼び掛け文に答えて、列席者全員に祝福の言葉を述べてもらったのは、初めての試みであったが非常に良かったと思った。また仲人夫人のプロ顔負けのオペラによる祝福の熱演には驚かされた。さすがに音大出ではある。私も朝の藤山神社参りを思い出し、大木に寄り添い咲く見事な藤の花と香を新婦さんへの祝福として

寄り添いて 香おり

艶やか 藤の花

と即興の俳句を贈った。

夜は、新婦の兄とその婚約者、新婦の父親と私の四人で佐世保の山手にある「弓張り展望台」に夜景を見にドライブに同乗させてもらった。美しい夜景を見ながらも花嫁の父は、「今夜新婚旅行に行ったハウステンボスはあっちの方か」と、しきりに気にしていた。気苦労な父である。一人娘を遠い地の嫁にやったからかも知れない。でもそれだけ愛情が深

い証拠なのだろう。

式がすんで、ほっとした父親の顔は確かに変わっていた。

翌日私は広島に下車して宮島見物をした。去年の台風で壊れた宮殿や鳥居はまだ修復されてないが、よく晴れた連休のせいか連絡船に乗るのは、一回待ちの有様であった。昭和二二年父親の亡くなった時、北九州から吉原までの帰りの山陽本線は、網棚まで人が乗っている復員列車で、とても中へは入れず、父親の形見の上着を身に纏いながら、列車のデッキに立ったまま揺られて広島辺りを通った時、夕日に映える赤い美しい鳥居を確かに見たように思い、「遠い日の夢であったかも知れない」と思いつつも、「もう一度確かめたい」との願いが叶ったものであった。ろくに親孝行もできずに、亡くしてしまった父親への思いを新たにしながら、広島駅を後にした。

今度の旅は殆ど一人旅であった。足の向くまま、気の向くまま、とまではいかないが、旅で名も知らぬ人に会い、話しをし、町の人の善意にふれたりすると、旅の良さと生きがいを改めて感ずるものである。

俳人等の一人旅の心が何となく解るような気がした。でも苦勞を共にした妻とのフルムーン旅行も別の良さがあるかもしれない。人は支えられ、いたわり会って生きて行く所に喜びがある。花嫁に捧げる言葉を私も自分に受けていた。

(一九九三年五月七日 記)

蟻道

早朝　ただ何となく、机に向かう。

机を二分する真つすぐな一本の蟻の道。

二mmに満たない小さな蟻たちの群れ

私が食べたビスケットの滓を誇らしげに両手に高く掲げながら
ちよつと止まって、ちよつと話して、一心に運んでいる。

蟻道を行き交う蟻の数が段々増えてくる。

行き交う蟻と蟻の間をくぐって 蟻道を指先でごしごしと 擦る。

道標を無くされた蟻は、あわてふためいて引き返しながら

角を付き合わせ くるくる回り、大変だ、大変だと、大声で話し

をしている……

蟻たち。

はぐれた一匹をセロテープにハリツケにする。

拡大鏡でもがき動く全身を観察する

精巧な関節、先端が円くなった前足、スマートなウエスト
とても人間ではできない神の造形美を 朝の私に与えてくれた。

机の上の蟻たちは、ちょっと曲がったバイパスを作り

何事もなかったようにせつせと蟻道を歩んでいる。

私は もう、意地悪をする気にはならなかった。

(一九九三年七月十七日 記)

心の泉（忘れ得ぬ小さなできごと）

ごしごしと鯉節を削る音で我が家の朝は始まる。

小さくなつた赤身の鯉節、かんなの上を走らせる

熱湯に入れて散って行く鯉節。

たらいに浸かつた洗濯板の上を

石鹼を付けた下着が 今日もしごかれる。

冬の冷たい朝 母の手はあかぎれていた。

小判型をした風呂桶の中に、鑄鉄の釜が鎮座ましている。

まき割りの音が、隣近所からも聞こえてくる。

生乾きのまきから出る白い煙、「火吹き竹」に涙がぽたりと落ちた。

すいとんを練る、配給のメリケン粉は少なかつた。

一並びの ふかし芋、食べ盛りの 僕ら子供達
食べた振りする、母の口には入らなかった。

白い さらしに 赤糸の結び目が少しずつ増えて行く

息子の無事を祈り 道行く人にすがる婦人

千人針の 結び目は 堅かった。

帰省した 我が家の付近は、一面の焼け野が原
防空壕の上の 焼けトタンが 動いた。

中から母と弟、家族全員が無事 出て来た。

心の糸の ささやきは 今も強く残っている。

(一九九三年八月二十二日 記)

存在

谷川の清流に手を差し入れると、凍るほどの冷たさを私に与えつつ、流れは私に関係なく過ぎ去って行く。後から後から、とめどなく流れ来る水、私は手をそっと抜いてみる。水は何事もなかったように、尽きることなく、変わることなく、流れ続けて行く……。

私の人生とは何か。社会という流れに手を入れてみても、流れは変わらずに、流れ過ぎて行ったのだろう。濁ったり、渦巻いたり、泣き叫んでみたり、怒鳴ってみたりして！私の回りを通り過ぎて行ったあの人、この人。悲しいときに親身に慰めてくれた名も知らぬあの人、悩みながらも志願して戦地に行った友達、大好きだった先生、私の脳裏から離れない人々は私の心の中で生きている。そして今も私を慰め、励ましてくれている。過去だけではない。今も私を生かし続けてくれる多くの人達、私は幸せをその人達から授け続けている。共に生きる喜び、悲しみを共にする慰め、人生とはそこに生きる価値があるのだろう。

偽らざる行き方に、飾らない行き方に、人を信ずる行き方に、『共に生きる』私の行く、

たった一本の道がそこにあるのだろう。自分のことだけしか考えない人生は、何か物足りない思いがする。みんなと一緒に泣いたり笑ったり、そんな一つ一つの出来事が、毎日を豊かにしてくれるのだと思えるのだ。ただ、がむしゃらに前に進むのではなく、私なりに少し立ち止まって、大きく深呼吸をしながら、また歩いてみよう。善意に囲まれた私だから、そこからきくと、私にも人を思いやる気持ちが生まれて来るに違いない。私の存在の意義は、そこだけにあるのかもしれない。

そんな私に、神様は何と言ってくれるのだろうか?……。

(一九九四年一月十日 記)

心眼

最近テレビで『脳と心』と題して五、六時間の番組が放映されたが、またそれと別に新聞の科学情報欄に人工網膜研究の記事が載っていた。名古屋工業大学を拠点にして、内外の英知を結集して、六年掛かりで原理的な技術を確認する予定のようであるが、最終的には人の心にまで入り込まねばならぬことではないかと思えた。

どちらも私には非常に興味を与えるものであった。人間が物を見るそして何かを感じるということ、同じ物を見ても人により様々な解釈が生ずることが何となく解らないことであった。例えば幼児が両親を書くのに、お母さんは大きく、お父さんは小さく書くことが多いのは何故だか私には解らなかつた。幼児の目には大きさの感覚がないのかなと思ったりした。前述のテレビや新聞によると、網膜に映し出されたものを脳に伝えるのに、必要な情報網のみを抽出して、伝えるとのこと、確かに我々が町を歩いていても、その総てを覚えているものではなくて、街角で特異な事故でも出くわすと、それは意識しなくても脳裏に覚えているものであり、必要な情報網として抽出されていたのだと解りかけて来

た。幼児がお母さんを大きく書くのは、幼児にとって母親が最も必要であり、父親より大きな存在であるためだろうと思えた。

上記資料によると、人間の視細胞は一億二千万個、脳に送る神経細胞は百万個あるという。一億二千万の視細胞が光の刺激を受けると視細胞に含まれた感光物質が化学変化を引き起こして、興奮して電気信号を出力し、水平細胞やマクリン細胞が何らかの処理をして、神経細胞に送られるとのこと、その処理の仕方が我々にとって問題だと感じた。幼児が母親を大きく書くのは、お乳をくれ、世話をしてくれる人が当然大きな存在意識として心に残っているから、当たり前の処置であることだと納得させられる。ある困っている人がいて、その人を見て、視細胞だけで神経細胞に渡さないで、何事もなく通り過ぎる人と、視野に入ったその人を見て放っておけないで、助けようとする人とは、中間処理の仕方が大きく隔たっていることを感じざるを得ない。道端の野花を見ても、何にも感じない人であれば、その自然の美しさに感動する人もいることは、単なる感性の問題と片付けられないものだと思う。視細胞に写った美しいものを捕らえ逃がさないで神経細胞に転送する処理の仕方、それはやはり教育の力やら、環境の問題でもあり、また本人の努力によって差異がでるもののように思える。幼児期に何が大切なものか、何をちゃんと覚えなければならぬか、そして美しさを感じずる心を養うことの必要性を改めて感ぜざるを得ない。それ

は視細胞のみによらず、耳からの情報にも同じことが言えることだと思う。

昔からよく言われる言葉に『心眼』という単語がある。辞書を引いてみると、「物事を見極める心の働き」と出ていた。自分が意識しなければならぬものを、ちゃんと捕らえる心の訓練が必要なのだろうと思う。あり余る情報の中から、自分に必要なものを逃さずに取り留めること、限られた人生の中に大事にして行きたいことだと強く感じた。

大人になってしまった私も、いや年寄りになってしまったことだが、これから少し暇でも見つけて少しでも心を入れ換えて行きたい。文字どおり七十の手習いではあるが。頑張っていきたい。

(一九九四年一月十三日 記)

心打たれしもの

物の豊富な時代に生きる者として、何となく心の通う場の少なくなっているように感じる今日このごろである。私の感性が鈍くなっているのかも知れない。昔よりもそのチャンスがなくなっているようにも思えるので、今までに受けた心に感じたことを書き留めておこうと思う。そして私達の心の交流に役立てて行きたい。

冷え冷えとした心ほど寂しいものはない。私達の心が冷え切らないように。もとより、一個人の心に感じたことであり、もっと多くの豊かな心暖まる事柄があると思うが、それらを聞かせて戴いて追記し、生きる糧として行きたい。

私は東京の日赤病院に近い所に住んでいたせいか、また自分が病気がちであったせいか、看護婦さんにお世話になることが多かった。三年間の足の病気をしたとき、診察を終えて診察台から離れる時壁に立て掛けてある松葉杖を、忙しい合間にさっと取ってきてくれる看護婦さん、健常者では解らない有り難みを感じた。病気をすると人の心の暖か味が解る

感性を与えられるように思う。病をしたお陰である。

電車通勤をしていた時のことだが、駅に奥さんや、子供さんがご主人を迎えに来ているのを見掛けることがある。何となくそのご家庭や夫婦の中の暖か味が感じられ、心の結ばれた思いが伝わってくる。家族の絆は、心のこもったちょっとした行為で強められるものかも知れない。自然に湧き出る愛情を基とした行為は、他人の目にも暖かく映るものであり、爽やかな心の香りを伝えるものである。

私の家の近くにおられる方で、海岸清掃を一人で長年にわたり、毎日行っている御主人がおられるが、誰から表彰されるわけでもなく、黙々となさっている行為は、ただ頭の下がるものである。『継続は力なり』という言葉があるが、しっかりとした信念の持ち主であろう。その奥さんも病弱の身をおして民生委員として、本当に慎ましい生活の中から、人のために働いておられる姿は正に我々の範なのかも知れない。この世に生を受けて、他のために働く喜びを身をもって示してくれている。私には過ぎたる師である。

先日一つのどらやきを半分戴いたことがある。二つある物の一つを戴くことはよくある

ことである。一つの物をちぎって共に食べることは最近では少なくなっているように思える。私はそれからあの食糧事情の悪かった時、一つのお芋をちぎって家族中で食べ飢えを忍んだことを思い出した。一つの芋をちぎって食べるそこに家族の心の連帯が育ったように思える。物の豊富な時代にそのチャンスは少なくなっている。

一つの物をちぎって食べる時に共に同じ喜びがあり、心の通じ合う基礎があるのだと思う。経済の豊かさが、また核家族化の進展が、共に喜び共に悲しむ心のつながりを妨げているように思える。食糧難の時には、どらやきを食べるなど、思っても見なかったが、今は一つだけ買うのが何となく恥ずかしくてできない位、物の豊かな時代になっている。心を分かち合う賢い行いを作り出していく工夫が必要なのかも知れない。

先日耳の医者に三か月程通った時のことである。いつも満員の状態で狭い玄関には靴の置き場もない程の有様で履物が散らかっていたが、八歳位の女の子がせせと人の靴を並べ整えていた。親から言われたのではなく、自分からしているようであった。親御さんがどのような躾をされたのか、自分のことを思うと恥ずかしい限りである。

毎年、花の日に、教会学校の生徒を連れて、老人ホームの鑑蹟園にお見舞いに行くのが

習わしとなっているが、老人ボケしたお年寄りを若い保母さんが二、三人で駆け足のように忙しく面倒を見ている姿を見ると、お花を持ってお見舞いにまごまごしているのが恥ずかしい位である。若い人がお年寄りのために、きびきびとした働きを見るのはまた心暖まる思いである。

長男、次男が小学生の頃、吉原駅の線路を挟んだ南北の唯一の道路であった地下道がよく汚れているので、たまには掃除をしてやろうと、長男次男を連れて掃除をしたことが二、三回あった。私達がやっていると言う噂が、誰からとなく聞こえてきた。私達のした、小さな行いが誰かの心を少し打ったのかと思っている。唯一のことであるが、こんな私でも勇気を出してやれば、人の心を少しは打つことができるのかと思った。実は私一人では照れ臭いので子供を連れていったのであるが、子供にとっても多少の躰になったかも知れない。

買い物をする時、「有り難うございます」といわれる。幾らかのマージンがあるからだと思う。またそれがその人に対する利益があるから当然なのかも知れない。

こちらが物を借りるのに、貸すほうが「有り難うございます」という挨拶を受けること

が時々ある。もちろん利子をつけて返すのではない。この常識を破った奇妙な現象が富士市にある。それは市立中央図書館だ。その一言が、受ける方としては、やはり気持ち良いものである。本を大事に、なくさないように、約束日にはちゃんと返そうと思わせるものである。常識を破ったこの挨拶を聞くのが私の楽しみでもある。気持ち良い図書館の発展を祈るばかりだ。

先に書いた通り、私は中学生の頃、足の骨の結核という長い病気に掛かった。すんでに足を切断せねばならぬ状態であった。その頃は保険などなく全て自費負担である。足の補助機を着ける頃だったと思うが、その頃の父は友達と3人で銀座に事務所を構えた出版社がうまく行かず、経済的にも苦しい時だったと思う。ある日目覚めると母が、たんすから着物を出して風呂敷にくるんでいた。私は寝たふりをしていたので、私が見たことは、母には解らなかったと思うが、多分あれは私の補助機のために、質屋に行ったのだと思う。治療費のことなど一言も私には口に出したことの無い母であり、私もいまだに着物のことは聞いたこともないが、慈母の愛に、心打たれる思いである。

もう四半世紀も前の話であるが、一九六三年の秋、私達は教会学校の先生の研修会で湯

が島の本立荘に泊まった時、テレビで初めての米国との宇宙中継があると聞いた。テレビの前に釘づけになっていると、アメリカのケネディ大統領狙撃の報が飛び込んできた。驚きで、一瞬テレビ放送を疑った程である。自由を掲げる偉大な大統領として尊敬していたのに、惜しい人をなくしたと思っている。

そのケネディが帰還の宇宙飛行士の首に記念のメダルをかける時に、誤って足元に落としてしまった時があった。普通なら慌てる所であるが、慌てることなく拾いあげ、ニコニコと「空の有志に、地上から栄光のメダルをお送りします」といって首にかけて上げたとのことである。

ユーモアを解する心暖かな人でもあった。

大分前である。東大総長の茅さんと記憶しているが、『小さな親切運動』を提唱された。人のために為す小さなことでも、人の心を暖めるものである。ぎすぎすした社会に生きる者として、人の心を暖かく打てる者になりたい。その勇気が欲しい。

「人の心を真に開くものは、他の愛の心である」ということを心にとめて生きて行きたい。どんな人にも善意を神様が授けて下さってある、と信じながら。

古希の前日

大正十三年生まれの私は、明日でとうとう満七十才を迎える日がきてしまった。嬉しいような悲しいような複雑な気持ちである。本来なら大いに喜ばなければならないことかも知れない。でもまだ、他人事のような気がするのにはなぜなのだろう。

誕生日の前祝いとして、日曜日の今日、近くに嫁いだ娘がケーキ等を作ってこれから孫達を連れて来てくれるらしい。七十才、古希と言っても私自身ちっとも実感が沸いて来ない。まわりで祝いの言葉やら、誕生会をしてくれると、私も、随分年を取ったのだなあと思わざるを得ない。まがりなりにも、勤めているせいかも知れない。

二三年前「我が心の堅琴」と大それた題を付けて、自分誌なるものを少し書いて見ただけで思い出はそちらに任せるとして、東京大坂間六円の汽車の運賃の時代から、鈍行で八千三百四十円の今日の時代まで、倍率にして実に一千三百九十倍の差額の今日まで生き延びた訳である。

オギャーと生まれてから、日にちに換算して二万五千五百五十日、時間に換算すると約

六十一万三千二百時間である。二・五日に一匹魚を食べたとしても、一万匹の魚の犠牲の上に生きているのである。命を大事にしないと、神様の罰が当たるとつくづく思っている。

ここまで書いてみると、下で孫たちの大きな声が聞こえて来た。娘の子供はまだ四才と二才であるが、なかなか活発な男の子達である。ワープロが途中までなので、二階で続いていると四才の孫が「おじいちゃん、おめでとう」と何か包みに包んだ物をもって来てくれた。娘が私に似せた手作りの人形である。頭に僅かの毛が乗せてある。自分の姿の人形に会うのは七十にして初めてである。下に降りて行くと、娘は持参の手製のパンに、昨日私が買っておいたイチゴをちやっかりと乗せてクリームケーキなるものを作っていた。

早速、一日早い誕生会が、お鮎とビールで始まった。もうじき九十六才になる母も一緒の祝宴である。九十六才から二才まで入り交じったお祝いを戴いた。その人形を抱いて早速記念写真を取ってもらう。どんな顔で写っているか楽しみなものである。七十才前日の顔とでも題してしまっておこう。ともかく、みんな元気で冗談を交わしながら、私の古希の祝いの前夜祭を迎えることができたのは、幸せなことだと感謝している。

母、孫も

古希祝ぐ夫の

皐月花

と一句妻が読んでくれた。私が七十才になっても、母が健在で共に祝ってくれることは私には過ぎた喜びである。

明日の本番の日は、相模原の長男も京都の次男もそれぞれ勤めをもっているので解らないが、きっとそれぞれの孫たちが電話で祝ってくれることと思っている。電話がかかって来たら、何と言って答えよう。それまでに考えておかねばなるまい。

小さいとき病弱で苦勞をかけた母、共に生活した姉や弟達、そして私と一緒に苦樂を共にしてくれた妻、子供達、会社の同僚、教会の牧師や信徒、そして今日まで守って下さった神様、私はまだまだ負債を負っているのかも知れない。七十と言う峠を越えても、私のペースを落とすことなく、進んで行きたいものである。

誕生日の前日、九四年五月一五日は、終日小雨であった。

(一九九四年五月一五日 記)

『私の友』について

七月七日、七夕の朝日新聞全国版朝刊に「ふるさと・青山焼け野原『同期生』」と言う見出しで、私の母校、東京の青南小学校卒業生が五〇年目の記念文集を自費出版したことが、社会面に写真入りで約半ページに渡って報じられていた。私の卒業より八年程後で卒業した後輩達のことではあるが、自分のことのように懐かしく、また羨ましく読んだことであつた。

私の卒業より一年前に完成した鉄筋一部四階建ての校舎やら玄関入り口の門塀等掲載された写真を見ると飛んで行きたい衝動すら感じるものであつた。小学校の卒業アルバムも中学校の友達の写真も全部、昭和二〇年五月の空襲で焼いてしまった私にとって、友の顔も名前も記憶の中にしか存在しないのである。私の卒業は一九三七年(昭和十二年)であるからもう五七年も昔のことである。

毎日誘いあつて登校した友達、第二次世界大戦の時イタリー大使をしていた父親が終戦後に戦犯人となつてしまった『白鳥』という友達もいた。もち棹を担いでトンボ取りに青

山の鉄砲山によく行った友達、道路で石蹴りのめっぽうまかった友達、ペーゴマの仲間達、私にとっては貴重な友の面々である。皆今頃どうしているのかとの懐かしい思いに耽るばかりである。

中学に入ると、その頃は旧制中学でしかも東京の市立工業学校だったので、ほとんどは東京のあちこちから電車を通う生徒であり、私の家のそばの子はいなかった。そのかわりに、私の学校の数学の先生で、同じ町の高樹町から通勤しておられた花田先生と言う方が私の友達みたいなものだった。学校まで歩いて約三〇分、会うと山の好きな先生は山登りの話をしながら、私を退屈させずに学校までつき合ってくださいました。ご存命ならもうだいぶお年を召されたはずである。秋田の方に行かれたとのこと。お会いしたいものである。

中学の一年の秋の旅行は、仙台青葉城跡から、松島の御大堂を通り会津若松の白虎隊の墓をみて、新潟より佐渡が島に渡って行く長旅で、友との思い出多い旅であった。宿泊地の新潟の百貨店の屋上で電動馬車に友達と二人で乗って壊してしまい、早々に宿に逃げ帰ったのを覚えている。

真面目に勉強したことより、失敗したこと、怒られたこと等を鮮明に覚えているのは、勉強が余り好きでなかった私の性格のためなのかも知れない。昭和二〇年に入社した日産自動車の友達と言えば、麦飯を共にした仲間というより、菓パンを共に食べた仲間と言う

ほうが適切な表現と思える仲間である。一つ二つ浮いている『すいとん』が、朝食であったり、タバコと交換に僅かの芋を手に入れて、ふかして食べる時が王様であったり、ともかく友を思う気持ちの薄らぐことの多い時代ではあった。首切りという悲惨な出来事の中に、私のいた課から『大森』という女の子の犠牲者が出たことは、忘れられない出来事である。経済情勢のためとはいえ、共に生活をし、喜びも悲しみも共にした仲間から離されるということは当人にとってどんなにか辛いことであつただろうかと、四〇年余り過ぎた今も、心の痛みとして残っている。悲しい友の思い出である。

日産位大きな企業となると、課員の入れ換えも激しく、心深く友として残る人が少なくなるのはやむを得ないことなのかも知れない。しかし、私の人生の大半を過ごした働き場所として、その企業、その工場、その課、その人々、そして文化活動を通じて知り得た人々、それぞれが私の掛け替えのない友として残っている。日産を定年で退社してから、日産に関係のある、後藤製作所にお世話になって早、十年の歳月が過ぎた。五、六百人のこぢんまりした企業のせい、人の顔も何となく覚えられ、工場を歩いても、手を上げれば手を振ってくれる人が多い。友というか、仲間としての親しみが強いのである。通勤の途中でよく手を振ってくれる人、誕生日を覚えていて祝ってくれた人、様々な善意の人々に囲まれて毎日を送れることは、幸せなことに感謝している。

先日職場の仲間に、『幸福の尺度』について「幸福の尺度は、孤独からの距離に比例する」と言う私の持論を披露したら感激してくれたので意を強くしたものであった。少なくとも私は家族に恵まれ、職場に恵まれ、その人々のお陰で孤独から遠ざかっていられることは、本当に幸せなことと思っている。日本人の寿命が世界一になり、私もまだ少し生かしてもらえなことかも知れないが、思えば今までの人生は、『友』という掛け替えのないものの上に成り立っており、私もそれらの人の『友』として少しでも役立ちたいと念じているこのごろである。小学校の記事が私の心に一つの『蘇り』を与えてくれ、拙文を書く気持ちにしてくれたことに感謝して筆を置きたい。

(一九九四年七月一六日 記)

昼休みの丘にて

丘の下にはテニスコートがあった

今日は誰もいない　がらんとしたテニスコート

コートの白線ばかりが鮮明で　二本のポールが　寂しく立っている
それから南に連なる家家の屋根が下降線をたどりながら

遠く駿河湾まで続いている

その中を大きく孤を描きながら西にのびている高速道路

ぽっかり口を開けた海が　天と地の境を一直線で結んでいる

西には　浜石岳を先頭に南アルプスまで連なる峰々

私はそれらが望見できるこの丘が好きだ。

じっと目を閉じると

昨日のラケットの音が　健康な肉体が　人々の嬌声が　そして流れる汗が

一時の幸せを テニスコートが包んでいる

私は ふと 大きな釘抜きをもって来て 屋根屋根をぶち抜いて行く

じゃらじゃらと 耳をつんざくパチンコの 騒音

真っ赤なネオン 必要以上の冷房 人生の貴重な時間を蝕んで行く
そして台に向かった血走った眼 にたにたと笑みのこぼれる顔が
私に迫って来る

「お前も 儲けて みないかと ……」

私は夢中になって もう一度釘抜きを大きく振り回す

尿道に管を入れ ベットに付き添いもなく 一人横たわる老人

隣の部屋で 臨終を事務的に告げる医者。

裁判所の一号法廷で相手の弱点をくどくどと突く 原告や被告達
聞き取れぬ小さな声の裁判官。

発砲騒ぎの暴力団事務所前の高級車の群れ

それ等を四六時中見張りをする パトカーの赤いライト。

私は両手で耳をふさぎ 夢中になって

幸せを崩すのは おまえ達だと！

地曳き網を引いて それらを駿河湾に 投げ入れてやる

生物の原点と言われる海の中に

頭を冷やして 出直して来いと ………

私は残った家家の窓べに 小さな灯をもって入る

シャンデリアの輝く 自己主張の着飾った家は要らない

裸の灯で良い

小さな二軒長屋に 灯をつけよう

共にいたわり会う 小さな家庭に

赤ん坊に乳房を含ませ 語りかけ ほほ笑む母の顔

二才児の兄貴は すやすやと寢息を立てている

食卓に御馳走が なくてもよい

共に励まし合い 助け会う 愛があれば
貴方達は幸せなのだ と 話してあげたい

私の貧しい灯だけど

七〇年生きて来た証として
：

私は目を開けて山々に ぶっつけてみる

私の思いと 私の願いと そしてこの大きな怒りとを

山は にこやかに 静かに ほほ笑んでいる

何も「こだま」してくれないけれど

私は山が 解ったと 頷いてくれたような気がする

昼休みの終了を告げる予鈴が

工場から かすかに聞こえて来た。

(一九九四年七月三〇日 記)

我が心の豎琴

(一九九五年五月一六日発行)

著者 城所 進

静岡県富士市鈴川中町二の六

カバー絵 城所 満

扉・題字 城所 愛子

発行者 城所 俊一

城所 望

鈴木 幸美

印刷・製本 (有)フォームアート

